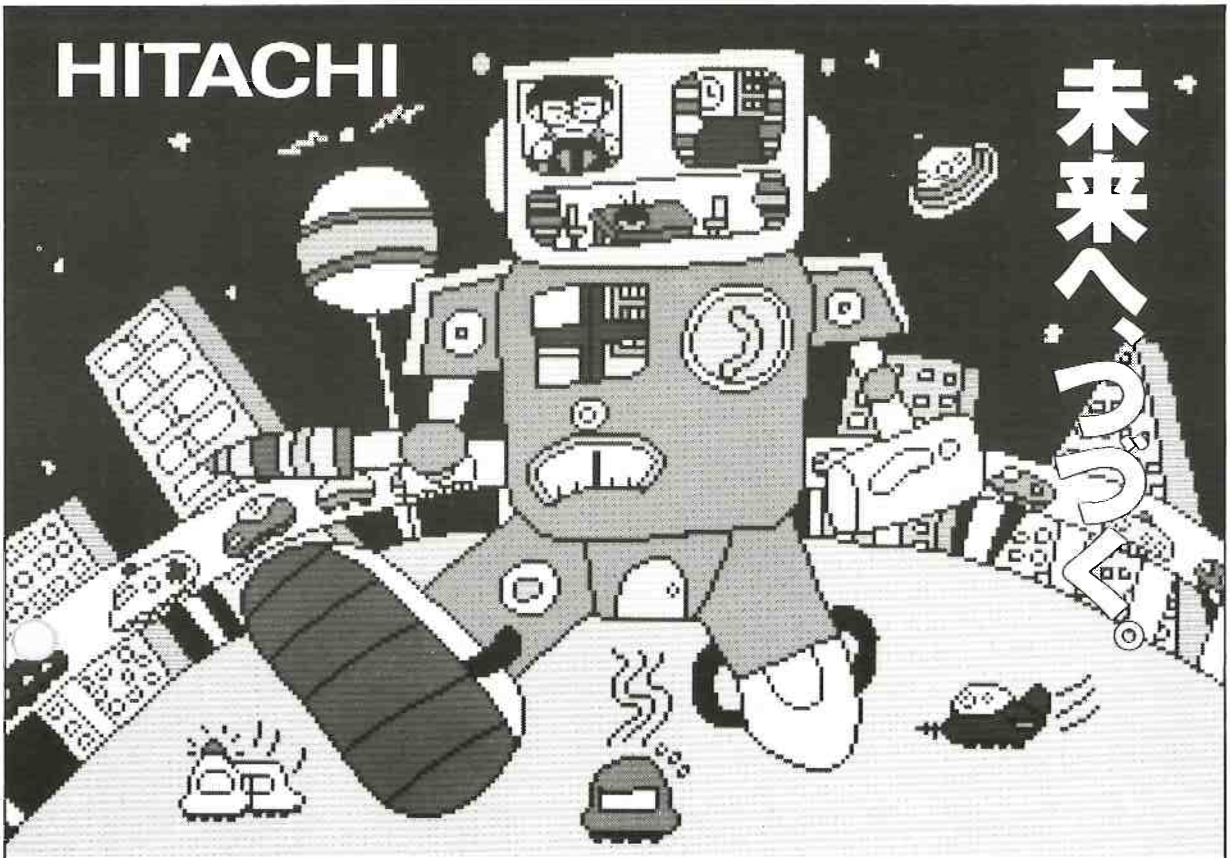

HITACHI
未来へ、つづく。

第1回極東トーナメント大会報告



全日本チーム選手団長　植村　繁

　昨年8月広島でバルセロナ・オリンピックへの切符を手中に出来ず悔しい思いをしてから早くも一年が経ちました。その間、新生ナショナルチームはアトランタを目指せを合い言葉に強化に励んで来ました。その成果を試し、次のステップを目指すのに格好の大会が9月5日から12日まで中国上海市で開催されました。

　この大会は昨年広島でアジア選手権大会が開催された時、同大会に参加した極東諸国の代表者の親睦の席で各国のナショナルチーム強化のための交流を図ろうということで開催を決定、今回が第1回大会として開催されたものです。

　試合内容等については監督が書いて下さると思うので、私はこの大会に参加し、見たり、聞いたり、感じたりしたことを記して見たいと思います。

　人口1300万人の中国最大且つ経済の中枢を担う国際都市とは言いながら新旧入り交じり雑然とした都市・上海は、来年9月に開催される東アジアスポーツ大会を控え、スポーツ面にも活気を呈し始めていた。

　当初の情報では郊外の名もないホテルに宿泊するとのことで試合以外の面に大きな不安を抱きながらのスタートであったが、確かに林立する国際級のホテルには比ぶべきもないが日本のビジネスホテルよりは上等で一応快適な生活を送ることができた。

　宿舎、体育館ともに郊外にあったため中心部の雑踏に関係なく行動できたことは有り難かった。しかし空港への往復、買い物等は雑踏に阻まれ容易ではなかった。

　大会は男女ともに6ケ国7チーム（中国はナショナルチームの他に地元の上海チームが参加、各国ともナショナルチームが参加するのが建前であったが韓国はオリンピック後でナショナルチームが解散してしまっているため男子は全成均館大学、女子は実業団選抜）が参加して開催された。大会は来年の東アジア大会の前座と言う事でなかなか立派な運営であり上海市の幹部、中国オリンピック委員会事務総長などが来場され盛り上げを図っておられた。

　中国人は何事についても大仰でのんびりしているのはわかっていてもペースを合わせるのは骨が折れる。ミーティング等はその日の全ての試合が終了した10時過ぎに始まり終了するのは午前1時、2時というのにはいささか参った。

　第2回以降の大会についての会議も持たれたが、各国のナショナルチームが参加して毎年開催したいという各国に対し、日本はIHF主催の大会の過密化を理由に数年に一度を主張したが合意に達せず、第2回大会の開催を要請されている日本が10月末までにその諾否を世話役の中国協会に回答することとした。

　競技は男子チームが6勝0敗で優勝、新チームになって1年足らず、公式大会では無いとはいえ貴重な経験になったと思う。これをバネに一層の強化に励まれることを期待したい。女子は残念ながら4位に終った、この経験を無駄にせず一層の努力を望みたい。

　今回の遠征に同行、支援して下さったレフェリー、ドクターそしてスタッフ、選手諸君の今後の活躍を祈念してペンを置く。

全日本男子チーム監督　蒲生晴明

はじめに、今回の遠征につきましては、日本協会、各所属チームの関係者の皆様に大変にご苦労をおかけし、また、ご協力、ご支援を賜わりましたことを厚く御礼申し上げます。

さて、昨年9月、広島でのバルセロナ・オリンピック予選にて韓国に敗れ、その出場権を取れなかったことと、何よりもアジアでナンバーワンになれなかったこと、この二点が大変悔しい思い出として残っておりました。その思いを新生ナショナルチームを選抜してもう一度チャレンジすることをターゲットにスタートし、9ヶ月が過ぎました。

そして、今回、標記の第1回極東トーナメント大会が開催され、非常に意味のある大会であったわけですが、この大会で6戦全勝で優勝することができ、その意味でも大変嬉しく思っております。それも、中国、韓国に勝利してともなればなおさらでした。これも早い時期にナショナルチームを選考することができ、良き選手に恵まれたからであって、その選手と所属するチームの関係の皆様のバックアップに大変感謝するところです。

しかしながら、今回の大会は、'94広島アジア大会優勝、'95アトランタ・オリンピック予選勝利を目指す我々にとって、現在のチーム力を計る上において、基準になる大きな大会でした。

この大会で優勝することができたことは、素直に喜んでよいと思いますが、この大会の反省を早期に行い、今後の強化に役立てるために、一瞬も休むわけにはいきません。対戦した中国、韓国、台北、北朝鮮等、これらの試合の分析を選手とともに十分に時間をかけ、実施していくつもりですが、ここでは各国の特徴を簡単に列記します。

中国については、昨年9月の広島バルセロナ・オリンピック予選のメンバーから若返っており、平均年齢で日本とほぼ同様の23～24歳程度で、大型のチームでした。技術力よりパワー、スピードでゲームをしていくタイプで、日本が後手に回った時の破壊力は相当なものでした。この中国には、今年3月の世界選手権B大会で直接対戦し引き分けており、選手たちも「この次は！」という意気込みを持っていましたので、集中力と闘争心を十分にぶつけてくれた一戦でした。

また、韓国については、バルセロナ・オリンピックで第6位に入賞し、世界的なレベルとしてもかなり高いレベルに位置するところを実証していました。今大会もその特徴を十分に持った素晴らしいチームでしたが、スピード、フェイントどれをとっても参考になる技術を実戦で示していました。

しかし、この韓国の特徴を日本選手たちが、三―二―一ディフェンスによってコンビネーションで守り抜き、後半の一番大切な場面で、そのディフェンスからの速攻により連続得点をして勝ち抜いたことが大きな収獲でした。

その他、台北、北朝鮮も強化に力を入れており、今後の動向を注意していかなければならないと考えております。まだまだ日本ナショナルチームは未完成の状態であ

大会成績

日付	部	チーム	得点	前半	後半	得点	チーム
9月5日	〈女子〉	日本	25	11－11	14－9	20	上海
	〈男子〉	日本	31	12－5	19－11	16	上海
9月6日	〈女子〉	日本	31	15－8	16－8	16	台北
	〈男子〉	日本	26	13－9	13－10	19	北朝鮮
9月7日	〈女子〉	中国	28	13－12	15－10	22	日本
9月8日	〈男子〉	日本	43	20－7	23－5	12	香港
9月10日	〈女子〉	日本	44	19－2	25－2	4	香港
	〈男子〉	日本	37	16－9	21－10	19	台北
9月11日	〈女子〉	韓国	36	20－11	16－14	25	日本
	〈男子〉	日本	28	12－14	16－10	24	韓国
9月12日	〈女子〉	北朝鮮	32	16－13	16－11	24	日本
	〈男子〉	日本	29	11－9	18－10	19	中国

〔女子順位〕①韓国②中国③北朝鮮④日本⑤上海⑥台北⑦香港
〔男子順位〕①日本②中国③韓国④台北⑤北朝鮮⑥上海⑦香港

るわけで、この勝利を良い自信に、驕ることなく「自分自身」をより鍛えていく方向で強化していくつもりです。

いずれにしても、この勝利を第一歩として、「今より何か違うプレー」「何か味のあるプレー」などを明日からの強化計画に反映させ、可能な限り挑戦し、実戦で生かすように努力、精進していくつもりです。今後もナショナルチームに対してまして、皆様の暖かいご支援、ご指導を賜りますようよろしくお願いいたします。

全日本女子チーム監督　緒方嗣雄

東アジア地区の親善とナショナルチームの強化を目的とした第1回極東トーナメント大会が、中国(上海)で行われ、日本からも男女ナショナルチームが参加した。オリンピックに参加した韓国はナショナルチームが参加できず、女子チームは実業団選抜であった。地元上海選抜チーム、他国はすべてナショナルチームで参加した。

上海市の北東部揚浦区にある白玉菊賓館に、全参加役員選手が宿泊し、揚浦区体育館とすぐ近くの虹口区体育館の二ケ所で行われた。女子の参加国は、韓国、北朝鮮、台北、香港、中国、日本、上海選抜の7チームによるリーグ戦で行われた。

日本は、上海、台北、中国、香港、韓国、北朝鮮の順に試合を行い、中国戦の後は2日休みとなり、試合順及びコンディションづくりには絶好のスケジュールとなっていた。

出発前の合宿では、目標は昨年のアジア選手権と同様準優勝。そのためには、ディフェンス・スタイルを二つ以上持つこと。今回は、一線防御と、一―二―三防御を主体として、攻撃に於いては、2人、3人のコンビネーションプレーで得点を重ねられように重点的に練習をした。特に、一―二―三ディフェンスは練習試合で何度も経験し自信を持つことができた。

攻撃に関しても、従来の大砲こそなくなったものの、サイドプレーとスカイプレーにある程度自信を持てるようになった。一番の狙いは、一ポジション30分で3得点取りに行く、ねばりがあり攻撃型選手を前面に出し、トレーニングを積み重ね、この大会に臨むことにした。

第1戦は、上海選抜チームと大会の開幕戦として行われた。日本チームも新チームとなり初戦であった。全日本初参加選手を半分の6名で日本のスローオフで試合開始。ブロックのプッシング反則で即上海ボール。カットインプレーで先取点を取られ、落ちつく間もなく得点されたため、一層冷静さを欠き、得点を重ねられて15分までに4点リードをされたが、持ち前の速攻、ロングヒッター貴田のロングシュートが決まり、前半同点で終了することができ、落ちつきを取り戻した。後半は、思い切りの良いプレーが随所に出て、初戦を勝利で終えたが、反省すべきところが多く、特に精神面からくる消極的なミスは、早く直さなくてはならない。

第2戦は、前回の北京アジア大会で引き分けたチームであり、メンバーもそのままである。台北戦に対するチーム目標は、昨日の試合より内容の良い気迫のある試合をすることである。昨日の堅さが取れ、合宿で積み重ねて来たプレーがよく出て来ている。ロングシューターも自信を得たようだ!! 速攻もスピードに乗って来て、完璧な試合ができた。

第3戦は、中国戦。昨年のメンバー内のベテランが抜け、若い中国チームである。合宿で練習を行なって来た一―二―三ディフェンスを試みた。ディフェンスの成功で前半は12対13と1点差で折り返したが、ディフェンスでのスタミナ切れが見えて来た。後半は、ディフェンスするのが精一杯で、オフェンスに余裕がなくなり、攻撃リズムが崩れてミスが出はじめ、中国に得点を重ねられ6点差で中国に敗れた。

第4戦は香港戦。力の差があり、終始日本ペースで試合ができた。

第5戦、韓国（実業団選抜チーム）戦。韓国の層の厚さを見せつけられた試合であった。スピードのある個人技、一対一を簡単に破られて得点を取られる。フォローディフェンスができないまま連続得点される。後半一時はよく追いついていったが、韓国に思い通りの試合をされてしまった。

第6戦は北朝鮮。広島のアジア選手権出場メンバーと変らず、チーム力は相当の気迫を感じた。プレー面では、スピードがあり、コンビネーションもでき上がっているように思えた。ボール持ってからの攻撃にスピードがあり、振り向いた時は抜かれている状態であった。前半はどうにかディフェンスできるが、後半に入りスピードと力に振り切られてしまい大差がついた。

全試合を通して、得点力が25点ぐらいであり、3点ぐらい不足している。失点については30点以上あるので、5～6点減らすディフェンス力をつけることが大切であろう。もう1点は海外へ行ってどのような状態でも戦える強い精神力を養うことである。

今大会の成績を深く反省し、次大会に生かして日々努力していきたいと思います。

第1回極東トーナメント大会

審判員として参加して

浜田　浩和

私たちが審判員として海外に出るのは、第1回アジアユース大会(シリア開催)についで2回目。ナショナルチームの帯同としては初めてで、また極東アジア地区のナショナルチームが集まるということで、貴重な体験が出来るだろうと期待し、中国・上海に向いました。

9月4日に日本選手団と共に成田空港を発ち、3時間あまりで上海に着きました。その日の夜、代表者及び審判会議が行なわれました。審判会議では、各国の審判が紹介され、国際Aは中国3人、香港3人、台湾2人、国際Bが中国1人、北朝鮮2人、日本2人の13人で、今回は韓国の審判は参加していませんでした。そして、翌5日の審判割当てが審判長より渡され、レフェリーミーティングは、毎朝9時半より行われ、その際に審判割当てを各審判に渡すことが連絡されました。

今大会は、男女各6チームのリーグ戦で、1日6試合が行われました。

大会初日、北朝鮮対台北(女子)を担当しました。内容は北朝鮮のワンサイドゲームでしたが、笛にかたさが現われ、満足のいくものではありませんでした。2日目、男子の中国対台北の試合はシンプルなゲーム内容となり、初日に比べ吹きやすく、満足のいくものでした。3日目は女子の上海対台北でしたが、この試合で改めて女子の試合での私たちの課題を再確認しました。それは、ステップの見きわめと、能力差のある試合をどのように組み立てていくかという点でした。

大会4日目、私たちの担当した男子の北朝鮮対中国の試合内容は中国のワンサイドでしたが、両チームの選手は少しエキサイトぎみで、退場するケースでも悪質なファウルによるものがほとんどでした。後半残り6分中国のワンマン速攻を北朝鮮のGKが防ぎ、その後2人が接触し、中国の速攻選手に北朝鮮のディフェンスに戻った選手がつめ寄り混乱しました。私たちは両チーム共選手を叱責し、落ち着かせることを行いました。

この事件の裁定を審判長に委ね、両チーム1人ずつ追放の判定をし、残り試合時間を行ないました。翌日、大会は幸いにも休養日で、夜レセプション後にこの問題に関して全役員が集められ、会議が行われました。内容は事件の報告と、今後の両チームの試合についてで、約1時間の会議で、追放となった両選手は残りの試合を出場停止ということ、今後はこのようなことが起こらないよう各チームに注意するよう言い渡されました。

私たちに対する裁定をとても心配していただいた団長の植村さん、井さんの心遣いと、中国の審判長孫先生や協会の御配慮で、私たちには何んの裁定もなく、翌日から審判をすることが出来ました。この事件が私たちにとって今大会だけではなく今までの審判活動で貴重な体験となりました。

さらに貴重な体験の一つとして、好カードである5日目の男子韓国対中国、最終日女子中国対韓国の試合を担当出来たことです。男子は日本が優勝したため、この韓国対中国が準決勝にあたり、最終日女子は全勝同士の韓国対中国が決勝に相当したからです。地元中国の応援も今までに味わったことのない大声援で、鳥肌の立つ思いでした。そんな中で、私たちは自分の笛を吹くことが出来、満足感を得ることが出来ました。

今大会で私たちが体験したことを、今後の審判活動に生かし、日本のハンドボールの発展に少しでも役立てるようがんばります。最後に、今大会で大変お世話になりました全日本スタッフと派遣していただいた協会に感謝すると共に男子チームの優勝にお喜び申し上げます。

小笠原久郎

全日本男子チームの帯同審判員として、我々は9月4日に上海入りしました。この大会は、極東アジアの代表チーム同士の大会としての位置付けです(ただし、韓国男女は単独チームでした。昨年、広島での決定がうまく伝わっていなかったらしい。開催国・中国は代表チームの他に開催地の上海の男女それぞれのチームが参加していました)。参加国は、中国、上海、台北、香港、北朝鮮、韓国、そして日本の男女チームでした。同様に各国からは帯国審判員も参加しました(ただし韓国は不参加)。

この大会の審判員は、国際ハンドボール連盟のA及びBの資格の審判員で大会運営されました。我々はパネルBでの参加でしたので

思いきって割り当てされたゲームを精一杯吹こうと胸に秘めながらも、割り当てがまわってくるのか半信半疑でいたところ、大会初日北朝鮮対台北・女子、2日目は中国対台北・男子、3日目は上海対台北・女子、4日目は中国対北朝鮮・男子、5日目は中国対韓国・男子、6日目は北朝鮮対上海・女子、7日目は中国対韓国・女子の試合をそれぞれ担当することができました。

なかでも中国対韓国（男女戦）のゲームは、優勝争いの一角の試合でした。男子の中国対韓国戦は終盤中国が逆転し、32－30で開催国が勝利を収めた試合でしたので観衆の喜びも日本の試合では味わうことができないくらい盛り上がったものでした。

最終日の女子の中国対韓国戦もスピード、テクニックのある韓国に終始くらいつき、1点を入れるたびに場内の観衆のどよめきは凄じい状況でした。

国際試合を担当するに当たり、大切である一つの姿勢を痛感しました。4日目の中国対北朝鮮の男子を担当した試合で起きたことはおそらくもう体験することのできない経験をしました。圧倒的に中国がリードして後半23分過ぎに中国が速攻。シュートしたがノーゴール、中国シューターと北朝鮮GKと接触後、両選手が小競り合い。即タイムアウト後仲裁に入りました。

その後、試合の再開をどのようにするのか、立ち合い人であった審判長と協議し、両チームから1名ずつ追放として競技再開することになり、我々はその手続きをし残り時間約6分を消化しました。とても長い6分間でした。我々審判定上のミスによりあのような事態になったのかというと、関係者（その後全体ミーティングの中でも）は、悪いのは選手であり、判定によるものではないという結論でした。

あのような試合でしたので我々にも当然ペナルティーがあるかと思っていましたが、最終日まで毎日割り当てをいただきました。しかしながら、反省するうちに、国際情勢の把握の認識も、審判する上で大変重要なポイントと痛感しました。国交が断絶したとか、さまざまな情勢の中において国際試合が行われている現実に対し、バックステップでもどれとか、選手から目を離すな、ベンチを管理せよ、といっている大きな意味をあらためて確認することができました。さまざまな経験ができました。

我々を指名していただいた審判委員会の皆様、そして大塚審判委員長に厚く感謝申し上げる次第であります。同時に、今後の全日本のますますの活躍をお祈り申し上げます。頑張れ全日本チーム！



写真は女子の日本対中国戦

第2回女子、第3回男子アジアジュニア選手権大会報告

さまざまな問題点を痛感

日本選手団団長　山下　泉

総勢38名の日本チームの団長として、8月20日から27日まで、北京で開催された第2回女子、第3回男子アジアジュニア選手権大会に参加した。当初予定は31日までとなっていたが、北京到着後、参加チームが減少したため短縮したことを知らされた。相変らずのAHFの不手際である。各国チームも9月1日帰国予定で参加しており、帰国便の手配に苦慮していた。幸にも日本チームは28日に全員無事帰国でき、安堵致しました。

北京は天安門事件後、私自身三度目の訪中だが、2年前のアジア大会と比較し、急速な経済開放が進展していたのには驚いた。外資の導入による合弁事業も目覚ましく、香港、米国、ドイツ、台湾などの進出により、ホテル、ショッピングセンター、オフィスビルなどが完成していた。北京市目標である「国際商業大都市」へと変貌しつつある。商業活動の自由化により国民の所得も増大しており、消費能力も相当なものでインフレ感が目立った。

選手団の宿舎は、北京アジア大会の選手村であったマンションで、2LDKに4人、冷房も故障が多く、冷蔵庫もない状態であり、電話の交換手も中国語のみ通用であった。食事は量的には十分だったが三食とも同じメニューの北京料理で、後半には体調を崩す選手も見受けられた。海外遠征の経験不足や外国の食事に対する順応性の不足により、体調の維持管理が出来ず、苦戦の原因にもなった。

大会会場は北京地坛体育館で、宿舎より20分ほどで、2千人収容の冷房完備であった。中国チームの不振のためか観客は初日の開会式を除いて少なく、盛り上がりに欠ける大会であった。

大会戦評については、監督、コーチが述べると思うが、日本チームはよく健闘したといえよう。クウェートは3ヶ月も欧州遠征しての参加だと団長が話していた。

女子は5チーム中4位。世界選手権の出場権を獲得した。男子は6チーム中3位。準決勝のクウェート戦がヤマ場であったが、カタールの審判で、アラブ民族意識に不利な戦いを余儀なくされた。実力は日本が上。男子優勝の韓国とのコンプレックスもなく、若いチームは堂々の戦いであり、技術的には勝っていたと思う。日の丸を胸につけて戦う誇りと責任感を持たすことの重要性を痛感した。

精神的なスタミナ不足とゴールへの執着心の欠如が目立つ。「点を取るのは難しく苦労して取るが、取られる時は簡単に」といった戦い振り。国体予選等で日本チームはベストオーダーは組めず、相変らず国内大会を重視し、日本代表チーム軽視が続いているようだ。それでは韓国に勝つことは至難のことであり、実力をつけてきた、クウェート、カタールに追い越されるかも知らない。

この大会の参加国は、審判滞同が条件にも拘らず、日本は審判の都合がつかず1ペアも参加していない。ためにクウェート戦のカタール審判など有り得ない不利な面がもろに出たが異議も言えない。審判部の強化と対外試合に支援体制をする必要を痛感した。



中国協会副会長・夏　朗氏とともに

AHFの新役員での初めての大会であったが、いつものアラブ主導型であり、締切日もあってなしの状態であり、優柔不断な運営であった。何故か大きな大会の開催国は東アジアの中国、韓国、日本であり、役員のほとんどがアラブ諸国からの選出であるという矛盾、早く解決しなければならない問題である。

不慣れな団長であったが、高橋、高野両監督、スタッフの皆様の助けをおかりし、無事大役を果たすことが出来ました。感謝致します。謝々。



会場となった北京地坛体育館



歓迎パーティー



中国の女性レフェリー

大会成績

◆8月20日

〈女子〉

中国 32（15－10、17－11）21 日本

◆8月21日

〈男子〉

韓国 27（12－9、15－16）25 日本

◆8月23日

〈女子〉

日本 30（11－9、19－11）20 台北

〈男子〉

日本 22（13－9、9－9）18 カタール

◆9月25日

〈女子〉

北朝鮮 29（16－11、13－14）25 日本

〈男子〉

クウェート 23（11－11、12－8）19 日本

◆9月26日

〈女子〉

韓国 33（18－13、15－10）23 日本

◆9月27日

〈男子3位決定戦〉

日本 24（13－13、11－8）21 台北

〈女子順位〉①韓国②北朝鮮③中国④日本⑤台北

〈男子順位〉①韓国②クウェート③日本④台北⑤中国⑥カタール

アジアジュニア選手権大会に参加して（女子選手の感想文）

鷲見　美応

今回の試合では、一戦でも勝ちとり、来年の世界選手権につなげる、という具体的な目標があったにもかかわらず、今までやってきたすべてを出しきることは不充分だったような気がします。

しかし、中華台北との試合などでは、練習したフォーメーションとかが何本か決まったりしたのは、大変良かったと思います。

初めて外国人との国際試合を経験する人が多い中で、外国人の当たりの強さ、審判の判定の基準など、肌で感じて戸惑ったと思いますが、いい経験だったと思います。一人一人が世界に通用できるプレーヤー目指して、一層みがきのかかったプレーをしていきたいです。

自分自身、各国のゴールキーパーを見てきて、韓国のゴールキーパーが一番良いプレーヤーだったと思うんですが、何と言っても基本ができていることと、足腰の強さを痛感します。ひとつひとつのプレーがきちんと基本ができているのは、足腰の強さからきているんだと思います。自分も見習いたいです。

友貞　由美

今回の試合は、ジュニア世界選手権の切符を得て、一つでも多く勝つという目標があったのですが、結局、自分たちの力を完全に出すことができなかったと思います。

緒戦の中国とは、緊張のせいか、ミスが多く続きました。次の台北戦では、中国との試合の反省を生かして、自分たちのプレーができたと思います。フォーメーションもかかり、台北は他の国のチームに比べるとまだ少しシュート力も低く、自分では、台北戦が一番よくキーピングできたと思います。

北朝鮮戦では、とにかく、フローターのシュートの速さ、タイミングに、自分自身合わすことができず、とても悔いが残りました。ロングを打たすという作戦だったので、なおさらせっかくディフェンスが方向づけをしてくれているのにとれなかったことがとてもくやしく思いました。

最後の韓国戦では、とにかく、思いっきりプレーしようと思って試合に臨んだので、自分ではまあまあだったと思います。みんなも思いっきりプレーをしてたようで、まあまあいい試合ができたような気がします。でもやはりシュートやいろいろな面で実力の差をはっきり感じました。

今回の大会は、私にとって初めての国際試合ということで、本当におどろくことばかりでした。他の国のシュート力など、日本との違いをしっかり見せつけられました。来年の世界選手権では、この経験を生かしていけるようにいきたいと思っています。

荒川　裕子

8月20日アジア大会オープニングゲーム、日本対中国。2日前まで日程も緒戦の相手も知らされていなかった私たちにとって緒戦、しかも開会式直後のオープニングゲームの相手が中国というのは必要以上の緊張をもたらした。

午後8時試合開始、緒戦ということもあってか信じられないほどのイージーミスを犯してしまい、終わってみれば11点という思わぬ大差で完敗してしまった。終わってから考えてみると、中国というだけでみんなびびってしまっていたような気がした。

8月23日台北戦。この一戦はどうしても負けられない。試合前監督に「今日の一戦は君たちがこれからハンドを続けていく上において非常に大切な一戦といってもいいだろう」と言われ、試合に臨んだ。前半から点数は取れるけど守れず、点差がなかなか開かない、中盤相手のミスからの速攻で連続得点することができ、後半も日本ペースで試合を運ぶことができ、10点差をつけての勝利はとてもうれしかった。

25日対北朝鮮戦。連日のゲームを見ているとかなりのプレスディフェンスをしかけてくる。対策をたてて試合に臨んだもののなかなか攻撃ができずペースがつかめない。前半はなんとか1点差で折り返すことができた。後半に入り、またもやイージーミスから点差を広げられてしまい、終始こちらが追いかける形となってしまった。結果は4点差で負け。勝てる試合だっただけにくやしかった。

26日対韓国戦最終戦。力でははるかに上のチームだけに、だめでもともとという気持ちで思いきりぶつかっていった。結果は23対33。自分の力のなさをいやというほど感じさせられてしまった。

結果的には世界選手権のキップを手に入れることができたわけだが、個々の力をもっとつけて本戦に臨みたいと思う。

上出恵美子

この大会は、世界選手権のアジア予選でした。私はこのような他国との大会は初めてのことだったので、すごくいい経験をしたなと思っています。

日本は開会式が終わった後、地元中国とのオープニングゲームだったので、世界の初めての試合とオープニングゲームで緊張が増していました。中国選手の背の高さにびっくりしてしまいました。緒戦ですから動きがいまいちスムーズではなく、ミスも連続してしまい、11点差という差で負けてしまいました。でもこの中国戦で次の試合への大きなバネというか、次はうまくやるぞという意よくがわいてきました。

2戦目は、中華台北とで、ここに勝てばほぼ世界選手権へ出場できるわけです。みんなは中国戦とのくやしさとでなおさらやる気が出ているみたいでした。結果は30－20というスコアで勝つことができました。私も思い切りプレイできた感じがしました。

3戦目は、北朝鮮とでした。北朝鮮というチームも動きはすばやく、けっこうやられるのではない

かと思いました。みんなも北朝鮮との試合はがんばっていたと思いました。結果は25－29の4点差で惜しくも負けてしまいました。

ラストゲームは韓国でした。韓国はどの試合を見ても、あっと言わせるようなプレイが多かったです。私もシュートが思うように打てず、本当にくやしいです。思い切ってプレイしていたつもりですが、思うように動けず韓国チームに動かされているといった感じでした。結果は22－33というスコアでした。

この試合で、自分の悪いところがわかったような感じなので、世界選手権までに克服できるように、またがんばりたいと思います。

松本　恵美

初日、中国と戦いました。結果的には、11点差で負けてしまいました。

前半、中国についていけたのですが、後半、ミスの連続から点を取られたり、自分たちが速攻でいっているのにパスミス、キャッチミスと点を取れる時に自分たちでこわしていく試合だったと思いました。中国が他のチームと試合をやっているのを見ていると、自分たちは勝てたのかもしれないという気持ちがしました。

次に、台北と試合をやりました。この試合には絶対に勝たなくてはいけないという気持ちがありました。出だし、自分たちのペースに持っていけませんでした。途中やはりミスが多く、自分たちが点を相手にあげているような感じでした。後半になって、点を取っていき、勝ちました。

次に、北朝鮮とやりました。正直いうと、あまり点は取れないと思っていたのですが、お互い点をゆずらずという試合をやっていました。前半が終わった時点で日本が1点勝っていました。後半は、点を取られないようやっていったのですが、ミスなどで点を取られ、4点差で負けてしまいました。ここで1本守ればという時に頑張れなかったので、最後まであきらめずいけたら良かったと思いました。

最後は、韓国でした。はじめからロングシュートを打たれ、3対0と点が離れていくばかりでした。DFでフェイントに対して前につめていっているのですが、ロングシュートに対してDFが低くなり、そこから打たれてる場合が多かったと思いました。前半が終わり5点差でした。後半は、これ以上点差がひらかないようついていこうと思いました。しかし、ほとんど速攻で点を取られ、結局10点差で負けてしまいました。

アジアジュニア選手権大会に参加して

4試合をやって、自分たちのミスがいやなほど多かったと思いました。特に、キャッチミス、パスミスでした。これだけは、きちんと確実にしていかなくてはいけないと思いました。自分たちは、速攻があまり良くないので、もっとバランス良くボールつなぎが出てくるといいと思いました。

今回、自分はいい動きが出きなかったので、今後、もっと回りが見られ、ロングシュートが決まるよう頑張っていこうと思います。

石垣　玲子

今大会は、世界選手権をかけた大きな試合で、一戦一戦を大事に、そしていろいろと学んで世界選手権につなげるためにも韓国など強豪国と試合をしていろいろと分析してみたいと思います。

まずオープニングゲームの中国戦は、開会式のすぐ後ということで、人もたくさん入ってたこともあってみんなかなり緊張していたと思ったけれど、世界選手権などでもこういうことがあるかもしれないからとってもいい体験をしたと思います。

試合内容は、はじめはみんな調子が良く、中国もミスをけっこうだしていたから、ずっと点差も開かずにいたけど、だんだんと中国は上から打ちはじめ、逆に日本はイージーミスやシュートを相手キーパーにことごとく取られ、後半には、もうかなり差が開いて、最後はもうボロボロになってしまいました。敗因は、シュート力にかなり差があると思います。背の高さもあるとは思うけど、やっぱり力の差がすごいと思いました。

2戦目は中華台北で、この試合ははっきり言って出だしはゆだんしていたと思います。なんとなくだらだらいってしまったけど、途中からは攻撃も守りもかみ合って来たからけっこう楽に勝てたと思います。

3戦目は北朝鮮戦で、出だしから気合がはいっていてずっと点差がひらかず、前半は1点差で折り返しました。後半に入り、相手がプレスディフェンスをしてきて攻撃ができなくなり、逆に相手に点を取られるという悪いパターンになって結局負けてしまいました。もっといろいろと相手に合わせた攻撃をやらなければならないと思いました。

最後の韓国戦は、はっきり言って本当に頑張った試合でした。だけどいろいろと学べたと思います。今大会を通じて、攻撃力のアップと守りを強くしないとだめだと思いました。

稲次　彩

日本を出発して、自分たちの練習してきたことがアジアでどれく

らい通用するのか、期待と不安を胸に中国に向った。

まず緒戦の相手中国とだった。緒戦だけあって緊張ぎみだったようで、前半からいつもの調子がでてなかった。私は出れない分ベンチから見ていてよくわかった。その分、自分が出たいと思うこともあった。

2戦目は、中華台北だった。この試合が私たちのチームにとって、本当に大切な試合でもあった。相手が相手だけあって、それなりの私たちの力を出せば勝てる自信はあった。それだけにみんな気合いが入ってたみたいで、はじめ接戦だったけど、2戦目なので試合になれてきたせいか、実力が発揮され、ミスも少なく、1点1点中華台北を引き離していった。

3戦目は、北朝鮮だった。前の試合で波に乗り、上々の立ち上がりだった。しかし、北朝鮮のプレスディフェンスで攻撃のリズムを崩され、北朝鮮ペースで試合が進み、負けてしまった。私が思ったのは、北朝鮮のディフェンスは運動量がとても多く、自分たちの運動量の少なさをあらためて実感した。

そして、いよいよ最終戦。相手は韓国なので胸をかりるつもりで向った。攻撃力、ディフェンス力は自分たちよりはるかに上回っていた。まずオフェンスは、韓国のディフェンスラインが高く、ロング、ミドルシュートはゴールの上か手に当たり、ノーマークになってもGKに止められることが多かった。ディフェンスは、両フローターに好きなようにやられた。

私が今大会で思ったことは、ディフェンスはもっと前に詰めることができるようになることと、オフェンスはポストを止められると何もできなくなるので、どこからでも点が取れるようになること、この二つを痛感した大会だった。

アジアジュニア選手権大会に参加して

森下 慶子

アジア選手権を終えて、試合の反省としてまず、第1試合目のオープニングゲームの中国戦では、みんなとても緊張していました。やはり、このゲームはミスがとても目立ちました。勝てたゲームではなかったのかと思います。観客もすごく多くて、緊張してしまったかもしれないけれども、自分たちのプレーができずに負けてしまい、すごくくやしかったです。

2試合目は台北との試合でした。1試合目に比べるとミスもなく、落ちついてプレーできていました。それに勝つ自信があったので、気持ち的にすごく余裕がありました。本当に勝つことはすごくうれしかったです。

3試合目は、北朝鮮とでした。北朝鮮のチームのゲームは前の試合を観戦して、ディフェンスが高めでくるとか、2番がすごいとか、いろいろと対策を考えました。しかし、なかなかやりきれず、北朝鮮のディフェンスにはまってしまいました。自分たちのプレーができないままゲームが終わってしまいました。得点の差もあと少しだったのにという感じだった、やはりミスが負けにつながってしまったのだと思います。

最後の韓国戦では、やはりスピードが速く、技術的にも少し上回っており、前のゲームを見ても、やはりすごいチームだなあと思っていました。みんなだめもとで頑張りました。お互いミスがありましたが、韓国に10点差で負けてしまいましたが、いいゲームができたので良かったです。世界選手権に出場できるので良かったです。これからも、しっかり頑張りたいと思います。日本代表として。

小林 直美

8月19日、世界選手権の出場権をかけて中国へ渡った。初めて中国に来て、初めての海外公式試合、複雑な心境だった。遅くまで試合のことがはっきりわからず、いらだちをかくせない状況の中、18日の夜、開会式の後にオープニングゲームをやるという知らせを聞き、20日開会式後、対中国戦が始まった。

緒戦で緊張していたせいか、自分たちのプレーが思うように発揮できないまま試合が終わったという感じだった。

21、22日は試合がなく、1時間程度の練習を午前中にやった。食事の方では、中国は食べ物はあまり良い方に聞いたことがないので心配したが、そんなに考えていたほどではなかった。

23日、対台北戦。この試合は絶対に落としてはいけない大事なものとなった。この試合を落とせば、世界選手権の出場権を獲得できなくなるからだ。この試合は中国戦よりリラックスしてプレーができ、30−20で台北に勝利をおさめた。

24日、休息日。各チーム合同で万里の長城へ行った。万里の長城は見事なものだった。あんなに長い道を昔の人は山の上に作るなど、真似できないと感心するばかりだった。

夜にはレセプションがあり、みんなでにぎわった。

25日、対北朝鮮戦。前半15−14の日本リードでむかえた後半、ミスが続いて25−29でもったいない試合をしてしまった。

26日、最終戦となる対韓国戦。当たって砕けろという気持ちで試合に臨んだ。前半10−15の5点差で折り返した後半、韓国に速攻が出だし、23−33で敗退した。

結果としては、出場権を獲得したが、試合内容としては完ぺきに自分のプレーをしたとはいえない。これからは、世界選手権に向けて、新たに頑張っていきたい。

今野　美穂

この大会で、私はプレーヤーとしては参加できなかったが、マネージャーとして参加することができた。マネージャーといっても、専門のドクターやトレーナーが同伴したので、スコアつけくらいしか仕事はなかったが、スコアをつけながらも、試合中は選手と同様に白熱し、まるで自分も一緒に試合をやっているかのように興奮した。

スコアをつけていて気づいたことは、日本は他国に比べ、ミスが多いということだ。パスミス、キャッチミス、オーバーなど簡単なミスから相手の速攻に結びついたりするプレーが多く見られた。

上からのシュート力も他国と比べると低い。ここで1点ほしいという場面で、なかなかシュートが決まらない。単発にシュートを打ちすぎると思う。

私はスコアをつけるにあたって客観的に試合を見ることができ、シュートを打つタイミングや、ここをこう攻めると、ここがあくとか、さまざまな点で勉強になったと思う。そして、韓国の速いパスワークからのシュートなど、これら自分たちが身につけていかなければならない課題もさらに多く知ることができて、これから世界選手権に向けていい勉強になったと思う。

私のこれからの課題は、まず、けがを治すことである。膝のけがなので、上半身は使えるから、その筋力をつけることをし、来年の世界選手権までに間に合わせたいと思う。

広瀬喜代香

今回の大会の感想は、他の国のチームと試合をし、勝てたことが、一番自分にとってよかったことです。私は、夜の試合というのは初めての経験で、試合のある日の生活をどのようにすごしたらよいのか、むずかしかったです。

朝、練習するのは、自分たちの体にとってちょうどいい時間帯だと思いました。朝起きて、そのまま試合の時間を待つだけだと、自分は、絶対、ずっと眠るだけだと思います。それで、いざ試合というと、絶対に体がなまって動けなかったと思います。

試合は、見ていてあと少しという試合ばかりで、自分にとっても、チームにとっても、たくさん課題ができたと思います。

でも、さすがに第1試合目の中国戦はみんな初めての国外戦で、すごく緊張していたと思います。でも、あとの3試合は、自分たちの試合をしていたと思います。

自分は、韓国戦、北朝鮮と、一番すごい試合にベンチ入りさせていただき、すごく緊張して試合を見ていて、いざ試合に出させていただいた時は、自分の頭の中が真っ白で、全然前など見えていなくて終わったみたいでした。試合が終わって、このことがずっと心残りでした。でも、これからの自分にとって、たくさん課題ができたし、世界のいろんなプレーも見れてすごくいい勉強ができたと思いました。

アジアジュニア選手権大会に参加して

芦ケ谷登美子

世界選手権の出場権を争うアジア選手権が、8月20日から27日まで中国・北京市で開催されました。私たちは、試合の日程など詳しいことはほとんど知らずに、複雑な気持ちで19日に日本を出発しました。北京に着くと通訳の中国人の人が私たちを出迎えてくれました。

20日は7時30分から開会式、そして8時から中国とのオープニングゲームがありました。中国とのオープニングゲームがあると知らされたのも18日の夜で、緒戦がオープニングゲームということもあってか、みんな緊張していたようで、本来の力を発揮することができず敗退してしまいました。

そして2日後、23日に台北とゲームをしました。最初は自分たちのペースをつかめずせっていたが、時間がたつにつれてペースをつかんできて10点差で勝つことができました。次の日の24日は試合はなく観光をしました。初めて万里の長城に行きました。みんなもこの日ばかりと試合のことを忘れて他の国の人とも仲良くしたりして、楽しい一日を過ごしました。

25日は北朝鮮との試合でした。最後まで一進一退の攻防をしていましたが、結局4点差で負けてしまいました。そして次の日も韓国との試合がありました。私たちにとっては最終戦でした。韓国はもう出場権を得ていたし、勝てる相手とは思ってもいなかったので、少しは気が楽にゲームをできたと思いました。だけど気がゆるみすぎたのか、ミスが多く結局10点差で負けてしまいました。5チーム中、4位というあまり良い成績ではありませんでしたが、世界選手権の出場権を得ることができて本当にうれしく思っています。

こうしてアジア選手権が終わったわけですが、日の丸をつけて試合に出てプレーできたことを光栄に思っています。これからも日の丸をつけてプレーできることを願って頑張りたいと思います。

アジアジュニア選手権大会に参加して

伊佐野実保

私にとって初めての国際試合に向けて北京に飛び立ちました。19日に出発するのに、18日の夜になるまで試合日も対戦相手わからない状態で、夜にオープン戦で中国と対戦だと聞いた時にはいよいよ始まるんだという実感がわいて来ました。

北京に着き、少し休んでから中国戦に向けて練習しました。

いよいよ開会式が始まり、オープン戦が近づいて来ました。開会式の間ずっと緊張していて、プレーのことばかりが気になって開会式のことはあまり覚えていなくて、いつの間にか終わっていた感じでした。開会式も終わり、中国戦が始まりました。中国戦では簡単なパスキャッチ、シュートミスが重なり、逆速攻や単発なロングシュートも入れられ結局11点差で負けてしまいました。

2試合目は北朝鮮に負けた台北との試合で、絶対に負けられない試合となりました。中国との試合ではミスだらけだったので、台北戦ではミスをなくしていくように心がけての試合でした。始めの方はなかなかペースがつかめなくてせっていたのですが、途中でだんだんペースをつかんできて、最後には10点差になり、世界選手権の出場権がとれたので良かったです。

北朝鮮戦では、前半1点差で勝っていたにもかかわらず後半で逆転されてしまい、負けてしまいました。

今、考えると、北朝鮮は中国に勝っていてその北朝鮮と4点差だったのに、中国に11点差で負けてしまったということは中国には勝てた試合だったかと思うと、とてもくやしいです。このくやしさを次のステップにしていきたいです。

友達もつくれて、試合もできて、私にとっていい経験になりました。

神津　奈美

7月の韓国遠征を終え、いよいよアジア予選が始まりました。

8月20日、開会式の後に、日本の女子はオープニング戦ということで一試合目に中国と試合をしました。緒戦ということで、みんなも私も、とても緊張していました。中国は、思っていたより全くスピードのないチームで、びっくりしました。そのわりには、ゲームの内容としては、技術以前の問題のパス・キャッチミスが多かったです。そのつまらないミスからの速攻が多かったです。試合を終えて考えてみると、勝てる相手でした。

23日、この台北戦は自分の一生の中でも一番、とても大切な一戦でした。とにかく、ディフェンスをがんばりました。試合前の先生の言葉を思い出して、がんばりました。結局、10点差で勝ったわけですが、本当に、うれしかったです。はっきり言って、ひと安心した。ホッと一息ついた、これで日本へ帰れる、と思いました。

25日、北朝鮮戦でした。今までの試合を見てきても、なかなか手強い相手だと思っていました。ディフェンスではプレスに出てくるし、オフェンスではスピードもあって、速攻も速いチームでした。でも、やってみると、日本もいい勝負をしました。しかし、最後にきて、時間の使い方がよくできず、差をつけられてしまい、結局、2点差で負けてしまいました。よくよく考えると、どうしてあの時に、と思う場面があって、くやしかったです。

26日の韓国戦では、韓国のスピードについていけるようにしたかったです。試合をしていて、学ぶところがたくさんありました。

世界選手権へ出場が決まりましたが、また一からやりなおして、世界へ向けて練習をしていこうと思います。

山川　由加

この大会は、来年の世界選手権にいけるかいけないかのすごく大切な試合でした。一つ勝てばいいのだけれど、それではやっぱりいやだから、合宿ではいろんなチームのディフェンスに対応できるようにやってきました。

でもなかなかコンビが合わず大変でした。

オープニングゲームは中国とでした。地元ということで応援もすごく、プレッシャーがありました。なかなか自分たちのプレーができず、イージーミスをしてしまい全然だめでした。身長も高く、日本は上からあまりロングをうつことができず、速攻もミスがあり、練習してきたことが全然出せず終ってしまいました。

2試合目は、台北とで、これは絶対落とせないゲームでした。中国戦の反省をいかして、ミスに気をつけて、ディフェンスをしっかりやり1本1本大切にいきました。中国に比べて背が低いので、ロングも打てて自分たちのプレーができてよかったです。次は北朝鮮戦で、ディフェンスがけっこう当たりがきついので、いろいろ考えて戦ったが、ミスがやっぱり点につながってそのミスで負けてしまいました。

韓国戦ではダメもとでいき、10点差で負けてしまったけどよかったです。とにかく世界選手権に出れてよかったです。

来年はがんばるぞ。

ジュニア・アジア選手権大会大会期間中のメディカルチェックとコンディション

河野卓也
横浜市立港湾病院

今回、男女ジュニア・アジア選手権大会にチームドクターとして参加した。私はナショナルチームは男女とも今年メディカルチェックをする機会があったが、ジュニアチームは今回遠征までに選手を診る機会がなく、チームドクターとはいっても、全く選手の状態を知らずに遠征することになった。そこで現地でメディカルチェックを行った。

まず前もって内科、整形外科、婦人科を含めた問診表を作成し、成田出発時に選手に記入させた。北京の宿舎に到着後は、練習や食事の合間にひとりずつ部屋に呼んで1日に5～6人ずつ、メディカルチェックを行った。フィールドバックは、選手にはその場で指導し、監督・コーチには全員のメディカルチェック終了時にまとめて行った。

その結果であるが、男子はさほど問題になる選手はなかった。女子は一人著しい貧血の選手があった。貧血があると持久力が低下すること、その治療のためには内服薬だけではなく食事療法が重要であることを選手に啓蒙した。また、女子でもう一人、膝の靱帯損傷の選手があり、試合には出場できなかった。この選手は帰国後、当院で手術を行い現在リハビリテーション中である。

また、男女とも既往疾患に足関節捻挫が多かった。外側靱帯断裂のない軽症の足関節捻挫の治療はテーピングや包帯固定で充分だが、靱帯断裂を伴う重症の捻挫ではギプス固定や手術が必要であり、これを放置すると後遺症として足関節不安定性が残存しスポーツに支障をきたす。幸い今回の選手には著明な不安定性のある選手はなかったが、たかが捻挫として軽視することなく正確な診断と治療が大切である。

次に大会期間中のコンディションおよびけがについて述べる。まず最も多かった内科的疾患は下痢であった。北京は水道水が飲めないため、選手はミネラルウオーターを飲んでいた。加えて冷たいコーラやジュースをかなり飲んだのと、中華料理に使われた多量の油も下痢の原因になったと推察された。ちなみに役員も二人が下痢と発熱で一時ダウンした。

その他の疾患としては、感冒、生理痛などであった。整形外科的なけがや故障としては、手関節捻挫、大腿挫傷、腓腹筋肉ばなれなどであり、大きなけがはなかった。

食事は毎回中華料理で、日本人にはあまりなじめない種類もあり、また同じメニューが何度も出てきた。そのため料理はいつもたくさん残っていた。選手の激しい運動量の割にあまりにも食事量が少ないのではと感じた。国際大会に出場する選手は、どこの国のどんな料理でも食べられてコンディションを維持できるような順応性が必要であろう。

次は役員の喫煙マナーについて一言。選手は全員未成年のスポーツマンであるから当然喫煙はしない。役員が喫煙するのは個人の自由であり、選手を指導するストレスのためタバコを吸う気持ちはよくわかる。しかし、タバコ片手でアドバイスしたり、食後に選手の横で喫煙はできれば止めていただきたい。また、飛行機なども禁煙席に選手を座らすなどの心使いもほしい。選手自身は喫煙しなくとも、選手に排煙による呼吸器系の害が及び、ひいては選手の競技力やコンディションに影響する可能性もある。ぜひジュニア選手の指導者としての自覚をもっていただきたい。

永松みどり
トレーナー

中国の北京で行なわれた男子と女子のアジアレベルではあったが国際大会に同行した。海外の遠征にトレーナーとして参加の経験はあるが、全日本であることや選手のほとんどが20歳以下であること、世界大会の出場権がかかっていることなど新たな緊張があった。

私の仕事内容として、故障を持ったプレーヤーが練習やゲームを行えるようテーピングをしたり、ウォーミングアップの手伝いをする。ゲーム中のケガに対する処置と、ゲーム後のアイシングやマッサージ・その他の物理療法の施行。その他のコンディションにかかわることを担当した。出発前に心配したのは、テープなどの消耗品が不足したら現地で入手できるだろうか。中国遠征にはどうしても出る消化器系の病気のこと。また、もし病院に行くようなことが発生したら不安な項目は数えきれないほどだった。

しかしテープなどは協会からあらじめ用意されており、充分な種類と数で私と選手は安心した。それに医師の河野先生の滞同により、病院に行くこともなく診断してもらえたり、抗生物質なども処方できた。

下痢症状の選手はやはり出してしまった。生水を飲んだわけでもなく、細菌性でもなく油が原因のようだった。朝・昼・夕の食事がとにかく油ぽいし、メニューはほとんど変化がない。体力が低下しているため腸が油を消化できなくなり、メニューに変化がないので食欲は低下するし、食べれる物がないのでますます体力が低下する。悪循環である。症状を訴えるのは男子選手が多かった（スタッフもふくめて）。女子は食事に、みそ汁あり、ふりかけあり、しょう油ありで、文句を言いながらもしっかり食べられた。女性はどこでも生きていけるのだなあと感じたし、私も体重は期待していたほど減っていなかった。

そういった条件の中でも選手は集中力を欠くことなく、いいプレーを毎試合に見せてくれた。国際ゲームに慣れていて、自分のプレーができる選手、なかなか実力が出せないタイプの選手といたが、ゲーム中の顔は日常の子供ぽい顔ではなかった。ケガは男子に2名膝の捻挫と大腿部の打撲が出たが、2名とも1ゲームおいた最終戦にはプレーした。

選手には時間があると、リハビリのためのトレーニングのこと、日常の自分で行うケアのことを話した。今後も実行して次回の集合する時には障害のない状態であってほしいと思う。

二つの国際大会を終えて

強化部長　井　薫

夏を迎え、ナショナル、ジュニアともに、アジアの舞台から国際活動が始まりました。

まず8月。世界選手権大会の予選を兼ねた男女ジュニアのアジア選手権が北京で行われました。男子は本大会への出場権は1ヶ国の厳しい条件下の戦いとなり、優勝を果たした韓国とは互角、クウェート戦は中東のアンフェアなレフェリングにあい、結局3位となり、本大会への望みは断たれましたが、山下団長のご報告では、技術、戦術ともにトップクラスで、今後が楽しみな大健闘であったそうです。(クウェート戦のカタールのレフェリーの判定のひどさは、9月の極東大会の会場でも話題であり、日本はアンラッキーだったと幾人もの関係者が語ってくれました)。

女子は、韓国、中国、北朝鮮に敗れ4位でした。ただ、女子は今回アジアから4ヶ国に出場権があり、来夏の本大会に出場しますが、同団長からは、基本技術の徹底とプレイヤーには気迫、スタッフには厳しさを求めたい、とのコメントを受けました。

ジュニアの強化の場合、高校生から、大学生、社会人と対象が広く、合宿等の設定は計り知れない難しさがあると思いますが、強いジュニアの存在が、強いナショナルに直結することを考える時、関係するみなさまの理解と協力を得て、スタッフには大いなる努力を尚一層お願いしたいと思います。

ナショナルは、9月の上海での極東大会に男女で出場、第1回の記念すべき大会を男子が見事優勝で飾ってくれました。

蒲生監督の率いる新生全日本、大幅な若返りでキャリア不足を懸念しましたが、GK橋本の抜群のキープ力と、一戦ごとにまとまり、力強さを発揮したCPの活躍は立派でした。特に決勝の中国戦の中盤、速攻を中心に連続得点で相手を突き放した集中力は、体格でそれほど恵まれない、このチームの特徴とも言えるもので、今後スタッフに厳しく鍛えてもらいたい楽しみなチームと思いました。

一方女子は、ジュニアと同じく、韓国、中国、北朝鮮についでの4位でしたが、昨年の広島でのアジア選手権から、こちらも男子同様に思いきって若返りましたが、若さのキャリア不足が、技術面、精神面に表われ、いずれもゲーム開始直後にリードを許し、それを追いかける展開で、苦戦の連続でした。

確率の高い攻撃につなぐ、基本技術を積み重ねることから生まれる自信、ゆとりを早く身につけてもらいたいと思います。

そして全日本を構成する場合、国内の戦力のすべてを網羅することが不可欠の条件であり、世界やアジアの日程に即した、国内の諸大会の開催時期の思いきった見直しが実現しない限り、国を代表するチームの受難は続くと思われます。

すでにこのテーマは日本協会で検討されていますし、強化の現場として朗報を待ちたいものです。

さて極東大会は、現在の中東諸国も混えたアジア選手権では、交流の際の距離や生活、宗教、習慣の違いなどが大きく、やはり東アジアがまとまり、リーダーシップを発揮すべきとの話し合いが、昨夏の広島のアジア選手権で行われ、早速本年第1回大会が上海で開催されました。開催は次に日本、そして韓国、北朝鮮の順で行われます。

日本協会としては、アジア選手権、アジア大会のない年、つまり4年に一度くらいと考えていましたが、参加各国は毎年行うべきとの意見が強く、日本もその要望への対応を迫られており、前向きな検討に入るところです。

今後の日程は、11月の女子B世界選手権、男子のハーレムカップ出場、そして学生の世界選手権と国際大会の舞台はヨーロッパに移りますが、男子の極東大会の優勝をきっかけとして、各々の活躍を期待したいものです。

最後に極東大会に帯同審判で参加した、浜田、小笠原氏のペア、女子ファイナルを担当、キビキビとしたレフェリングで好評でした。

ご苦労様でした。

各国選手の身体を張ったプレーに感心

全日本女子チーム監督
緒方嗣雄

昨年のアジア選手権兼オリンピック予選で日本チームが惜しくも敗れ、バルセロナ・オリンピック出場のチャンスを逃し、とても悔しい思いをしていた。韓国と名前を聞くたびに、悔しさばかりがこみ上げてきて、残念でならなかった。

韓国のチーム総合力はどうか、欧州チームの戦力はどうなっているだろうか。今回のオリンピックは、非常に興味を持って試合見学した。

ハンドボールの試合会場は、オリンピックのメイン会場（モンジュイクの丘）より離れており、汽車に乗って約30分、グラノリエルスという町であり、ハンドボールでは伝統があり、代表チームが日本に遠征したことがあるとのことだった。駅より歩いて5分ぐらいで体育館があり、周囲にはスペイン独特のバル（日本ではスナック）が3軒ほど、メインストリートはいろいろな店があった。ちょっと静かな所であり、試合は2試合ずつ1セットになって入場券を販売、セット間は2時間～2時間半の休憩時間があり、ビールやコーヒーを飲んで時間を過す。

予選リーグから決勝までの56試合の内、下位決定6試合と他に4試合ほどは見なかったが、11日間で45試合ぐらいを観戦した。この中で、女子に関する試合、及び総合的なことについてここに述べさせていただく。

大会直前になってユーゴスラビアの参加ができなくなり、代替としてノルウェーが出場した。大会前の噂で、ノルウェーは大幅にメンバー変更をし、来年自国での世界選手権に照準を合わせていると聞いていた。また、バルセロナに行ってからは3日間ほど練習をして参加したなどいろいろな噂を聞いていたので、特に韓国との第1戦を興味深く観戦した。

ほとんど初出場メンバーで年間を通して合宿してきた韓国に対しノルウェーは旧メンバーを3人入れ、前半こそ善戦するが、後半は韓国の前につめるディフェンスで一方的な試合となってしまった。ノルウェーは、前回のソウル大会でも応援団がすばらしく、国を挙げての応援であった。今回も体育館の観衆も応援に引き込み、オリンピックならではの感動する場面を見せてくれた。

女子才2戦目、韓国対オーストリアの試合。

オーストリアは、他国の有名選手をヒポ銀行に集め、市民権を取得させて国の代表としてオリンピックに参加させている。自国選手は、3名ぐらいである。名マネージャー・プロコンプが引きいるチームであり、今回も引退した選手を復帰させ、またルーマニアの名選手、トピアを新加入させ優勝を狙った布陣である。

試合は韓国はアタックディフェンス、前5人でポストマンをマンツーマンする変則ディフェンスで、ロングシュートを警戒する。一方オーストリアは1人前で後ろに5人のオーソドックスな1・5ディフェンスである。韓国の多彩なシュートにディフェンスを突破され得点を重ねられるが、サイドシュート、ポストシュートとよく粘り、一進一退のゲームとなる。残り時間13分頃、審判の判定を不服とした韓国のチョン監督が審判に詰め寄り退場となる。その直後より選手の発奮があり、4点をリードして試合を決めたかに思ったが、オーストリアの粘りで最後はノータイムペナルティスローを得て、それを決めて同点となる。韓国は4点をリードした時点で攻撃のリズムを変える戦法に出ると思ったが、常に早い仕掛け、または速攻と休む間もなく攻撃したのが引き分けの原因と思われる。また、サイドからのワンタイミングためるシュートは全部ラインクロス（着地）をとられたのも苦しい試合になった原因であろう。退場になったチョン監督は、次の一試合出場できず観客席での観戦となった。

韓国をノルウェー戦とオーストリア戦の二試合見た限りでは、昨年のアジア選手権時より数段チーム力が上がっている感じがした。その才一は、ディフェンスが良くなっている。昨年までは、アタッ

ターセプト、速攻にもっていきノーマークシュート。GKに阻止されはね返ったボールをノルウェーがキープ、残り5秒でノーマークのポストマンにパス、これを決めて1点リードでタイムアップ。劇的なノルウェーの逆転勝利。

続く才2試合は、韓国の順調な滑り出しで優位に試合を進めていくが、これまですべて決めていたPTをことごとくGKに阻止され、苦しい展開となる。後半15分、ドイツに追いつき一進一退がしばら

がらみの試合は興味深い試合であったが、もう一つ見逃せないのが準決勝である。EUN（旧ソ連）対ノルウェー、韓国対ドイツ。4チームの選手すべてについて言えることであるが、決勝進出に全身の力をこめた気迫のプレーばかりである。体当りのディフェンス、身体ごとゴールに飛び込まんばかりのノーマークシュート。一つ一つのプレーが理屈抜きで身体を張ったプレーだ。これぞ正しく国家代表チームの試合であろう。

残り時間2分を切ってからEUNがPTで1点リード。そのすぐ後、ノルウェーはポストシュートで追いつき、EUNの攻撃をイン

クディフェンスを長くやらなかったし、一対一のディフェンスに強くなってきた。才二は、センタープレーヤーが安定してきたこと。セットプレーの仕掛けが早く、展開が多彩である。勿論、今までの速攻のスピード、フェイントの切れ、多彩なシュートは健在であった。

日本からバルセロナ・オリンピックにチームとして参加できなかったが、レフェリーとして後藤氏と島田氏が参加して審判を務めた。

7月30日、女子の試合でスペイン対オーストリア戦。試合は一方的にオーストリアの勝利であったが、反則に対する笛は凜としてすばらしく、見ている私も感動した。

女子の予選12試合を見て、韓国

く続く白熱した戦いが続く。韓国もスローペースとなり、うまく逃げ切り決勝戦に進出。

決勝戦は、バルセロナ「サン・ジョルディ・スポーツアリーナ」で行われた。前半より韓国のペースで進み、予選リーグ同様に楽勝。ノルウェーを倒しオリンピック二連覇を達成した。スピードに加えテクニックが一段と向上し、またディフェンス力が上がったことが優勝につながったと思う。

各国共通して速攻が早い。それも縦に走りの弱いパスを利用し、ワンパス、ツーパスで得点をする。

攻撃時に目についたプレーは、バウンドパスを非常によく使う。特に男子プレーに多い。ランニングシュートをよく打つ。フェイントすると見せて、ランニングシュートを打つと見せてフェイントといったように、個人の多彩なプレーが目についた。

ディフェンスでは、韓国の前5人によるアタックディフェンスが変っていた。男子では、一―二―三ディフェンスが主流である。数多くの試合を観戦し、特に感心させられたプレーは、身体を張ったプレーが多いということであった。

最後に、全試合のチケットを手配していただきました渡辺副会長及びNHK杉山様には大変お世話になりました。今後は、この数多くの経験を役立たせていきたいと思います。

テレビ放映のお知らせ

NHKテレビスポーツ教室
ハンドボール基礎編
（ボディコントロール）

講師：蒲生　晴明（日本ナショナル男子チーム監督）

NHK教育テレビ

［日時］11月28日　16時30分～17時

男子ナショナルチーム監督の蒲生晴明氏がテレビでハンドボールの基礎技術について解説いたします。ぜひ、全国のハンドボーラーのみなさんに見ていただきたいと思います。

日本リーグレフェリーを初体験して

滝口眞聖



今回初めて日本リーグの審判をさせていただきました。普段は高校生の審判をしていることが多く、レベルの高い試合の笛を吹く経験も少なく、まして日本のトップレベルの試合の笛を吹くことになり、不安と期待でいっぱいでした。

会場は東京都体育館。この体育館がとても立派になっていて驚きました。会場内にはテレビの画面のような大スクリーン。いつもの高校生の大会のグランドコート7面とは大違いです。ただでさえ緊張しているのに、それが増すばかりです。

当日会場にはかなり早く着きました。しばらくすると両チームのアップが始まり、我々は観客席でアップを見ていました。そうこうするうちに開始30分前近くになり、審判の打ち合わせが始まるのでフロアーに降りて行きました。この打ち合わせが思ったより長く、失敗談の一つになってしまいました。というのは、打ち合わせが終わり、アップをしようと思ったらもう選手紹介が始まってしまったのです。打ち合わせがすぐ終わると思ったのが浅はかでした。結局アップもろくにできず試合が始まってしまい、ただでさえ汗っかきの2人は、前半で冷や汗も混ざって汗だくになりました。

実際の試合に関してですが、どうすればお互いのチームの力が出しきれて試合がうまく運営できるかということを一番考えました。やはり日本リーグともなるとキープ力があるので、途中でプレイを止めるような笛を吹いてはいけないということ。しかし、ラフプレイに関しては、打ち合わせ通り段階的に反則をとりました。

最後に、日本リーグの審判を初体験させていただき、普段とは「かって」が違うので吹きづらかったですが、自分もチームを持っているので、日本のトップレベルの試合を実際に体験し、少しでもチームに還元できれば良いと思っています。

吉岡寛元



1週間前、本県で行われた関東大会、インターハイ県予選大会が終了し、今まで ハンドボール中心の生活から一時だけ解放される日々を送っていた。だが数ヶ月前に届いた一通の委嘱状〈日本リーグ審判〉のことが頭の隅から離れず苦悩の毎日であった。

前日、知らず知らずのうち時が過ぎ、前日を迎えた。明日のことを考えると想像がつかず、今までの審判の経験とは全く違う勝手もわからない状況しか判断できなかった。しかし、冷静に出来たことが一つだけあった。それは審判を行うために必要な物を用意することだけであった。不思議である。

当日、とうとう来てしまった。目覚めはよく、朝食も満足にし足早に学校へいき、授業を終え、東京体育館に向った。その時の精神状態を思い返すと、試合のことなど忘れて意味のない会話などをしてリラックスしていたと思う。そして、新装された東京体育館に到着し、期待しつつ中に入ると、目前に現われたのは緊張感を増すだけのものであった。それは体育館の広さであり、テレビカメラの映像によるオーロラビジョンであり、各チームの練習風景であった。

時間だけは余裕を持って来たつもりが、各チームの代表者とのミーティングや着替えなど、勝手がわからない状況のまま刻々と試合時間が近づいて来た。

緊張感が最高潮に達した。互いに動揺していることを確認し、高校生とは違った日本リーグのルール（顔面も体の一部と判定、負傷者に対しての処置）を頭に入れ、充分なアップができないまま試合開始の笛を吹いた。

試合が始まり、互い目を合わす度、額の汗を拭うほどの発汗作用があった。しかし、これは先程述べた充分なアップができなかったことのせいである。スピーディなゲーム展開に、私たちの体力と集中力のバランスが崩れてしまった。このような状況の中、キーパーに対しての顔面シュートや負傷者に対しての処置などの種々な現象が起きた。その時、私たちは互いを信頼し合い、冷静に対応していたと思い出される。そして試合終了の笛が鳴った。

全体を通して、一つの不安を抱えてゲ

ームに臨んだこと、的確な笛が吹けなかったこと、その他いろいろと課題と未熟な点が反省として残った。また、多くの方々に助言をいただき、貴重な体験をさせていただいたことをチームに生かし、指導してゆきたいと思います。

日本リーグレフェリーを初体験して

大塚尚子



去る7月5日、日本リーグ二部女子「ソニー対ブラザー」を吹いた。吹き終えた後、ぐったりと疲れた。

4月あたりに審判をすることが決まって、あっというまにその日は来た。ゲームのプレイヤーが中学生であろうと学生であろうと、男だろうが女だろうが、私たちは同じ基準で吹くだけだとわりきってはいたが、実業団のプレーは、ステップのスピードが速いし、ファウルも巧妙だから、それに目がついていくかが不安だった。

おちついてやろうと思えば思うほど「観客はわざわざお金を払って見ているんだ」ということが頭をよぎってみたり、「日本リーグ」という名のプレッシャーで、ものすごく緊張した。

私にとって日本リーグの審判をすることは、「やっとたどりついたもの」である。岡山が地方であるためか、あまり実業団の試合がないから、日本リーグは遠い存在であったし、いろいろの試合を経てついに吹けることになったからである。

額田さんの「審判の判断には男女の差はない」という話を聞いて審判を始めて5年。最新はただがむしゃらに吹いていただけだが審判の奥は深く、次々と課題が出てくる。

審判をして、その判断が妥当で多くの人に喜んでもらえた時はとても楽しい。そんな時は、審判はすてきなサービス業だと思う。しかし、そうでない時は、誤まった判定を押しつける罪人(つみびと)となってしまう。

そんな厳しい仕事をいきなりビッグゲームでしなければならないのが日本リーグの審判だと思う。

これからも、機会があるなら、多くの人に喜んでもらえるように努力していきたい。

額田　都



私が本格的に審判として活動し始めたのは、大学院の2年生の頃であり、現在に至るまで大塚尚子さんと共に数多くのゲームを吹き、また、この度初めて日本リーグを体験することができました。

私自身、日本リーグは雑誌などでその動向に触れることと、数少ない岡山大会で、第三者として審判を見させていただくぐらいのことであまり目にすることはありませんでした。ただ、その少ない機会の中で感じたことは、女性審判としてのプレッシャーもありましたが、その雰囲気にのまれてはいけない、ゲームで見たままをきちんと笛で表現していこうということです。

そのためには、そのスピードに慣れ、プレーヤーたちの真剣勝負の場であるゲームの中でもまれていく必要があり、各地の学生リーグに出かけては、たくさんの試合を吹かしてもらい、自分にとって大変プラスになりました。

ところで、私なりに審判員として心掛けていることが2つあります。ルール上のジャッジやルールブックの解釈の仕方も当然悩むところですが、まず数多くのチームの戦術を理解することです。

それぞれのチームの戦術は、監督自身の戦術であり、ハンドボールに対するいろいろな考え方に触れることができ、またそのことは、審判員としてゲーム展開をよりおもしろくしていくことにもつながるでしょう。

2つ目は、ゲームを管理することです。自分の笛におごることなく、チームの良さが引き出せるような、また、見る側の方も楽しく、ハンドボールの質を高めていけるようなそんな審判がしたいと思います。

この先、何回このような大きな大会に関わっていけるかどうかわかりませんが、もし同じようなチャンスがあれば、一ゲーム一ゲームを丁寧に力一杯吹いていきたいと思います。

最後になりましたが、素晴らしいパートナーに恵まれたことに感謝して終わりにしたいと思います。

県協会だより

若き指導者の来道、大歓迎

北海道ハンドボール協会

この度、機関誌に協会だよりを掲載させて頂く機会を得ましたので、北海道にハンドボール競技を普及すべく献身的な努力をなされた偉大な先達の足跡を振り返り、当協会の課題を踏まえた将来への展望などをお話ししたいと思います。

１９４８年、奥平　憲司氏（当時日体大生）の教育実習教材として函館に持ち込まれたハンドボールはすぐにチームが結成され、それは第３回国体（久留米市）への庁立高女初出場に結実した。

特筆すべきは、この第３回国体での皆川茂夫氏との出会いであり、氏が来道しての指導を快諾下さったことが始まりとなった。

これ以降、同氏の人脈によった日体大先の来道が相次ぎ、室蘭・釧路・札幌とハンドボールは全道へ拡がりを見せ、現在では函館を始めとする先の３市に北見・旭川・帯広を加えた７支部を擁するまでとなった。

また、登録チーム数は１００チーム弱を数えるまでに至っている。

ただ惜しむらくは、登録チーム数の増加と競技力の向上とが伴わず１９６２年まで行なわれていた屋外コートでの11人制時代に高校男女・一般共に全国大会上位の実績を誇っていたものが、現在の７人制が導入された１９６３年以降、上位への進出が激減してしまった事である。

冬季、グランドが使用不可能な北海道に於いて、室内練習の出来る７人制は適していると考えられ、今後の解決すべき課題である。

しかしながら、この間にも北海道でハンドボールに接し、大学あるいは社会人チームに進み、学生選抜やナショナルチームの一員として活躍する選手が数多く輩出されたことは、当協会並びにハンドボールを愛し、情熱を燃やし、育んで下さった関係各位の努力の証しである。

創立50周年を間近にして我々はこの遺産を継承し、更に発展させ、次代へ引き継いでいかなければならない。

国体・全国高校総体・全国中学校大会をそれぞれ２度開催し、各支部協会に於いても日本リーグ招聘・国際親善交流を行なうなど着実に成長を遂げている。

他方、指導者不足などからチーム数が増加せず、組織の充実に苦労している現状もある。

しかし、これらの地域事情を理解し、相互協力の視点を持った良きライバル意識の醸成も大切であり、近年とみにその成果が具現化されてきている。

当協会が重点課題として取り組んでいるのは、

１　底辺の拡大すなわち小・中学生への普及とその為の指導者の発掘・育成

２　既存チームの存続と競技力の向上

３　各支部協会を含めた北海道ハンドボール協会人の発掘・育成

４　クラブチームの全国大会参加率の向上

以上の５項目である。

北海道は他府県に比し、面積が約６倍程度とされ、交通時間距離・移動コスト及び労力等から、組織運営・競技力につながる支部間交流も大変である。

しかし、人情厚く、自然は雄大、生活環境は自慢出来るものであります。全国の若きハンドボーラーの諸君、受入れ体制はありますので指導者としてのご来道を歓迎致します。

最後になりましたが、今日まで当協会をご支援・ご援助賜りました、日本ハンドボール協会並びに全国のハンドボール競技関係各位のご厚情に対し、この機会と紙面を拝借致し深く感謝申し上げますと共に、何卒今後共倍旧のご指導、ご鞭撻をお願い申し上げます。



県協会だより

本渡市ハンドボール協会が表彰を受ける

熊本県ハンドボール協会

日本ハンドボール協会より機関誌の原稿依頼を受け、課題の「県協会だより」を目にしたとき、日本ハンドボール協会機関誌も新たなページを刻むと共に、一層の充実と飛躍を確信しました。

初めての経験故、多少の戸惑いもあり、原稿締切りにご迷惑をお掛けしましたが、初回は本県で最も誇りとする本渡市ハンドボール協会をご紹介し県協会だよりと致します。

本渡市ハンドボール協会は、昭和34年同好の数名が集い産声をあげた。年を重ねるとともに会員も増加し、活発な活動が他の注目を集めるようになった。

現在会員数成年男女約70名、小・中・高生合せて300名余、年間活動日数延300日、対外行事への参加年間20回、参加者約300名、主催事業年間4回、参加者約1000名、年間予算（所要経費）60万円～100万円。

〈会の組織〉

●会長→副会長（3名）→理事長→事務局員（2名）

〈会の運営方針〉

●協会と会員が協力し、一般地域社会と児童・生徒の体力保持増進とハンドボールの普及・拡大を図る。

〈日常活動〉

●本渡クラブオールド、本渡クラブ（成年男子、女子）、スズキクラブの熊本リーグ、県民体育祭、郡市ハンドボール大会、郡民体育祭参加のための練習会。

小・中・高校クラブ活動の指導。

〈定期活動〉

●郡市ハンドボール選手権大会の開催、年間2回の開催、県内外より約40チーム参加。

●郡民体育祭ハンドボール競技会の運営、13郡中12郡が参加し、熱戦が展開され、レベルもかなり高い。開催地区の老人会や婦人会の協力もあって盛会である。

●ジュニアスクールの開催。毎年8月上旬に県内外から400名余の参加があり、10コートをフルに使って、基本技能からゲーム展開まで指導する。経験度合に合せてチームを編成し指導するので大変好評である。

〈地域社会及び職場のスポーツ振興への貢献〉

自主事業の大会や合宿の開催を通じてハンドボールの強化と競技人口の拡大を図るとともに学生の指導者、一般の指導者を配置し、中・高生の指導にあたり、底辺拡大と競技力の向上に貢献している。

また、本会に加入しているそれぞれのチームが、県内大会のみならず九州大会や全国大会で活躍している。

〈これまでの成績の主なもの〉

●全国小学生大会入賞（御領小学校）

●全国中学校選抜大会優勝（都呂々中学校）

●全国高校総体3位入賞（天草高校）

●国民体育大会5位入賞（本渡クラブ）

●世界選手権大会、オリンピック選手の輩出

●県民体育祭優勝7回

〈表彰・上記の活動が認められて〉

●昭和61年、熊本県体育協会よりスポーツ優良団体として表彰された。

●昭和63年、熊本県教育委員会より社会体育優良団体として表彰された。

●平成4年、文部大臣より社会体育優良団体として表彰される。



熊本日日新聞　昭和63年(1988年)10月4日　火曜日　スポーツ　(12)

63年度県体育功労者

赤星氏（県陸上競技協会理事長）ら5人

優良団体 本渡市ハンド協会

県教委は三日、本年度の県体育功労者を発表した。体育功労者に決まったのは県陸上競技協会理事長、赤星秀年氏、県ハンドボール協会参与、北川浩氏、県体育協会評議員、田爪正紀氏、元県ユースホステル協会会長、能田秀一氏、熊本郡市体育協会参与、米川克己氏の五氏。また、社会体育優良団体に本渡市ハンドボール協会を選んだ。表彰式は八日午前十時から、熊本市の県議員会館・むつみ荘で行われる。

赤星　秀年氏　北川　浩氏　田爪　正紀氏　能田　秀一氏　米川　克己氏

社会体育優良団体の本渡市ハンドボール協会

平成4年度体協ハンドボールC級コーチ養成講習会報告

猛暑の中、コーチ講習会開かれる



梅雨明けの猛暑の中、7月22日～28日までC級コーチ養成講習会が、オリンピック記念青少年総合センター（東京・代々木）で開催されました。

会には日本リーグの現役選手や大学チームの監督、国体開催地の役員等、女性2名を含む30名が参加し、熱心に受講しました。

講師には、合宿の多忙な中、ナショナルチームの蒲生監督やコーチングスタッフが駆けつけ指導を行いました。また、インターハイを目前にひかえた大宮泉監督（熊本市立商）の『日本一物語』は、受講者に大きな感動を与える等、暑さに負けない受講者の熱気の中で成功裡に終了しました。

〈講師〉

大西武三・指導委員会委員長
岡本研二・ルール研究委員
井　薫・強化委員会委員長
北川勇喜・元強化委員長
蒲生晴明・ナショナルチーム監督
藤原　侑・女子強化委員長
津川　昭・男子強化委員長
角　紘昭・指導委員会委員
松井幸嗣・男子ナショナルチームコーチ
穂積豊彦・女子ナショナルチームコーチ
大橋　晃・名短大付属高監督
大宮　泉・熊本市立商高監督
井上良太・小守スポーツマッサージ
藤原泰郎・大分東高監督
井藤英忠・湧永製薬監督
西山逸成・トレーニングドクター
木野　実・企画担当常務理事
清水宣雄・指導委員会委員
竹野奉昭・国際担当常務理事
公重盛公英・妙典中監督

〈受講者〉

中島昭博(岩手)、斉藤倫紹、笠原高明、佐藤成紀(福島)、会田宏(茨城)、市来未央、猿山美代子(栃木)、清水口真澄、山本興道(埼玉)、東根明人(千葉)、永松義浩、吉田久士、松井幸嗣、小山浩(東京)、滝本明弘(石川)、竹野秀輝(福井)、字栄原幸政(愛知)、立木浩二(三重)、奥田新治、酒巻清治、西山清、武田大伸(広島)、先田寿志(愛媛)、木下健作(福岡)、吉村辰己、西窪勝広(熊本)、亀井一寿(大分)、比嘉和直、黒島宣昭、東恩納盛秀(沖縄)。

競技力向上指導者（C級コーチ）養成講習会専門教科日程

	第１日目 7月22日	第２日目 7月23日	第３日目 7月24日	第４日目 7月25日	第５日目 7月26日	第６日目 7月27日	第７日目 7月28日
08:00～10:00		戦術・戦法論	ルールとレフェリング	ハンドボールの傷害予防 傷害とその処置	指導実習 個人技能の指導 集団技能の指導	実技 個人技能 集団技能 チーム技能	ハンドボールの国際情報
10:00～12:00		攻撃・防御論				実技 ゴールキーパーの技術とトレーニング	ゲームの分析 スキルの評価とその実際
12:00～13:00	30 集合・受付	昼食	昼食	昼食	昼食	昼食	昼食
13:00～14:00	開講式	実技	実技	指導実習	指導実習	ハンドボールの特性を生かした体力トレーニング法	資格検定
14:00～15:00	ハンドボールの特性 コーチの役割 コーチの制度	防御の個人技能	攻撃の個人技能	指導計画作成の実習	チーム技能の指導	体力トレーニングの実際	試験 閉講式
15:00～17:00	ハンドボールの歴史	防御の集団技能	攻撃の集団技能			ハンドボールの生理学	
17:00～19:00	夕食・入浴	夕食・入浴	夕食・入浴	夕食・入浴	夕食・入浴	夕食・入浴	
19:00～20:00	コーチ論 一般	コーチ論 義務教育期の指導論	コーチ論 高校女子	コーチ論 高校女子	コーチ論 討論	ハンドボールのバイオメカニクス	
20:00～21:00	女子指導論	高校（男子）	高校男子	中学校	討論	コーチ論 一般	

委員会報告　日本リーグ運営委員会

第72回運営委員会の決定について

さる9月19、20日、大和銀行琵琶湖荘をお借りして第72回運営委員会及び監督との合同ミーティングを開催いたしました。

今回は協会側からも中沢専務理事、山下財務、大塚審判、大西指導各担当理事、そしてオリンピックレフェリー(島田・後藤両氏)の土産話、指導委員(村松、小山両氏)により、パソコンによるゲームの記録収集データーのデモンストレーション等、協会側の出席、協力を得て盛り沢山のテーマと意義深い委員会となりました。

今回の委員会で決定した主な事項を以下にお知らせいたします。

一、ゴールエリア内のシートをテスト採用。

これは、松ヤニ対策、フロアーのカラー化対策の一環としてチームの体育館でテストして結果が良ければ本戦にて採用していきます。

二、第19回大会より登録背番号の規制。

GK3名NO1、12、16、FP17名NO2～11、13～15、17～20に規制します。

これは、電算による記録データーを導入するため登録人員および背番号を規制するものです。

三、第18回大会スケジュール(予定)

前期・平成5年6月1日～7月11日

後期・平成5年10月2日～10月17日
11月3日～11月21日

プレーオフ・平成5年11月25日
～11月21日

今大会はさらにホーム&アウェイの色合いを拡大して実施していきます。

◎JHLカップ'92のご案内

来る11月6日～8日(東地区女子は10月30日～11月1日)、日本リーグ加盟チームによる東西、男女別のJHLカップ'92を開催します。

元々JHLカップは、オリンピック予選、本戦の日程確保のために、日本リーグの前期と後期が大幅に空いた期間の言わば「穴埋め」のチャンピオンシップでしたが、'88年より「新人育成」に重点をおき、特に新人選手が一日でも早く、日本リーグの水に慣れる場を提供するよう目的を変えております。

近い将来、このJHLカップ参加選手の中から、必ず日本リーグや全日本を背負って立つ選手が出て参ります。若い選手がこのチャンスを活かせば、後期以降、レギュラー選手として活躍の場が与えられ、ひいては全日本選手入りの道も開ける訳です。

また、本大会では、日本リーグでは試合だけを行っている選手たちが、自らオフィシャル、得点係やモップ係を分担します。また、審判も各チームに滞同し育成に努めます。

これらは近い将来、ホーム&アウェイの完全実施がなされた時、自主運営の為の訓練にもなり、選手たちが分担して仕事を行います。

なお、目的が「新人育成」でありながら、大会名が「JHLカップ」では不釣り合いであるため、平成5年度以降「ルーキーカップ(仮称)」などと名称を変えて再スタートする予定です。

後期以降に活躍が期待される若手選手に暖い声援をお願いいたします。なお、いずれの会場も入場無料です。たくさんのご来場をお待ちしております。

東地区男子(11月6日～8日)
●会場:トヨタ自動車体育館=愛知県豊田市
●参加チーム:大崎電気、中村荷役、トヨタ自動車、三陽商会、三景、トヨタ車体、日本電装、豊田自動織機。

西地区男子(11月6日～8日)
●会場:本田技研熊本体育館=熊本県菊池郡
●参加チーム:大同特殊鋼、湧永製薬、本田技研熊本、日新製鋼、本田技研、北陸電力、竹芝精巧、大阪ガス。

東地区女子(10月30日～11月1日)
●会場:大崎電気体育館=埼玉県入間郡
●参加チーム:大崎電気、シャトレーゼ、ジャスコ、日立栃木、ムネカタ、日本ビクター。

西地区女子(11月6日～8日)
●会場:北国銀行スポーツC=石川県松任市
●参加チーム:北国銀行、オムロン、大和銀行、ブラザー工業、ソニー国分、JUKI。

以上。

各地の大会結果

東北

第45回東北高校選手権

（6月27、28日／仙台市体育館）

〈男子〉

▼1回戦

仙台育英（宮城）26－16 大曲（秋田）

盛岡第四（岩手）21－20 青森山田（青森）

仙台南（宮城）24－23 帝京安積（福島）

湯沢（秋田）26－25 北村山（山形）

▼2回戦

学法石川（福島）20－18 仙台育英

東根工（山形）22－21 盛岡第四

盛岡第一（岩手）25－19 仙台南

青森商（青森）21－19 湯沢

▼準決勝

学法石川 17－15 東根工

青森商 25－19 盛岡第一

▼決勝

青森商 18（9－8、7－8、2－0、0－1）17 学法石川

〈女子〉

▼1回戦

福島北（福島）16－10 日大山形（山形）

青森中央（青森）24－11 湯沢（秋田）

郡山女子（福島）23－10 青森西（青森）

不来方（岩手）26－22 古川商（宮城）

▼2回戦

盛岡第二（岩手）26－13 福島北

聖和学園（宮城）22－16 青森中央

大曲農（秋田）31－15 郡山女子

北村山（山形）27－11 不来方

▼準決勝

盛岡第二 18－14 聖和学園

北村山 28－21 大曲農

▼決勝

北村山 18（8－7、10－9）14 盛岡第二

関東

第15回群馬県中学校春季大会

（6月7、14日／富岡実業高校体育館ほか）

〈男子〉

▼1回戦

甘楽二 29－8 松南

藤岡北 18－6 下仁田東

富岡南 22－17 相生

藤岡南 15－11 富岡西

甘楽三 26－21 南八

矢中 11－4 下仁田西

▼2回戦

富岡東 19－8 甘楽二

藤岡北 20－13 富岡南

藤岡南 18－15 甘楽三

富岡 25－15 矢中

▼準決勝

富岡東 25－9 藤岡北

富岡 19－15 藤岡南

▼決勝

富岡 19－17 富岡東

〈女子〉

▼1回戦

相生 8－6 高崎南

▼2回戦

富岡東 30－3 相生

富岡南 23－11 塚沢

矢中 19－5 富岡西

富岡 27－0 松南

▼準決勝

富岡東 10－6 富岡南

富岡 18－7 矢中

▼決勝

富岡東 12－8 富岡

茨城県民総体

（6月13、14日／勝田自衛隊体育館）

〈男子〉

▼1回戦

日本原研 28－24 土浦三高ク

常陽銀行 31－20 勝田ク

▼2回戦

筑波学園ク 40－8 日本原研

茨城ユースク 28－18 茨城フェニックス

笠間ク 24－20 岩井高ＯＢク

茨苑ク 33－19 常陽銀行

▼準決勝

茨城ユースク 22－21 筑波学園ク

茨苑ク 24－13 笠間ク

▼決勝

茨城ユースク 24（11－9、13－9）18 茨苑ク

▼小学生男子

守谷ク 10－8 筑波学園ク

埼玉県高校総体

（6月13～28日／伊奈学園ほか）

〈男子〉

▼予選トーナメント1回戦

富士見 22－11 桶川

所沢緑ヶ丘 24－20 春日部東

大井 24－15 鴻巣

越谷西 18－16 科学技術

伊奈学園 25－13 吹上

聖望 29－15 川口

城西川越 38－8 宮代

春日部工 26－8 志木

草加東 25－24 大宮北

川口青陵 27－18 三郷工技

八潮南 23－15 秩父農工

八潮 28－10 浦和工

浦和西 28－15 川越南

草加 23－14 羽生一

西武台 24－10 岩槻

朝霞 28－16 上尾南

大宮 17－13 所沢北

埼玉第一 27－10 北本

浦和市立 26－7 花咲徳栄

川口東 22－12 城北埼玉

浦和南 16－12 坂戸

和光 23－22 秩父

庄和 19－7 春日部

三郷北 18－13 久喜北陽

筑波坂戸 27－12 上尾沼南

▼2回戦

富士見 21－12 上尾東

大井 27－14 所沢緑ヶ丘

伊奈学園 30－8 越谷南

城西川越 23－11 聖望

春日部工 22－19 狭山

川口青陵 28－14 草加東

八潮 24－12 八潮南

浦和西 25－12 幸手

草加 27－9 朝霞西

西武台 29－16 朝霞

埼玉第一 18－14 大宮

浦和市立 15－9 春日部共栄

越谷南 20－19 川口東

浦和南 41－4 和光

庄和 31－16 三郷北

筑波坂戸 37－7 久喜工

▼予選リーグ

●Aブロック
浦和学院 37－8 富士見
浦和学院 26－12 大井
大井 24－19 富士見

●Bブロック
川口工 25－16 伊奈学園
川口工 17－14 城西川越
城西川越 21－9 伊奈学園

●Cブロック
川口青陵 29－16 春日部工
川口青陵 26－22 大宮南
大宮南 19－14 春日部工

●Dブロック
川口北 39－8 八潮
川口北 19－13 浦和西
浦和西 28－16 八潮

●Eブロック
農大三 23－19 草加
農大三 25－15 西武台
西武台 20－15 草加

●Fブロック
埼玉栄 24－12 埼玉第一
埼玉栄 20－15 浦和市立
浦和市立 23－11 埼玉第一

●Gブロック
浦和南 19－15 越谷南
浦和南 16－12 小松原
小松原 18－17 越谷南

●Hブロック
浦和実業 35－11 庄和
浦和実業 30－13 筑波坂戸
筑波坂戸 28－18 庄和

▼決勝トーナメント
浦和学院 27－7 川口工
川口青陵 20－18 川口北
埼玉栄 28－20 農大三
浦和実業 15－14 浦和南

▼決勝リーグ
浦和学院 29－16 川口青陵
浦和学院 24－10 埼玉栄
浦和学院 18－17 浦和実業
浦和実業 22－11 川口青陵
浦和実業 22－11 埼玉栄
埼玉栄 19－13 川口青陵
〔順位〕①浦和学院②浦和実業③埼玉栄④川口青陵

〈女子〉
▼予選トーナメント1回戦
草加東 28－9 所沢北
浦和学院 28－8 本庄女子
行田女子 15－9 浦和商
宮代 30－7 和光
浦和市立 17－6 春日部共栄
越谷南 38－8 大井
上尾東 20－10 羽生第一
大宮南 14－4 上尾南
春日部工 22－4 騎西

▼2回戦
八潮南 17－12 大宮北
草加東 37－9 吹上
浦和学院 24－14 筑波坂戸
浦和南 30－9 深谷女子
行田女子 15－13 大宮開成
川口女子 32－6 宮代
浦和市立 24－11 秋草学園
草加南 21－14 朝霞
三郷北 20－9 幸手商
越谷南 23－18 草加
上尾東 29－5 春日部女
庄和 24－12 春日部東
浦和西 27－25 熊谷女子
大宮南 29－3 狭山
春日部工 14－10 農大三
埼玉第一 35－4 山村

▼予選リーグ
●aブロック
浦和実業 42－1 八潮南
浦和実業 45－9 草加東
草加東 21－15 八潮南

●bブロック
浦和学院 22－12 浦和南
浦和学院 19－15 西武台
西武台 22－14 浦和南

●cブロック
川口北 17－14 行田女子
川口北 21－10 川口女子
行田女子 11－9 川口女子

●dブロック
伊奈学園 28－8 浦和市立
伊奈学園 25－11 草加南
草加南 15－11 浦和市立

●eブロック
埼玉栄 35－0 三郷北
埼玉栄 39－8 越谷南
越谷南 23－10 三郷北

●fブロック
小松原女 19－11 上尾東
小松原女 26－7 庄和
上尾東 26－15 庄和

●gブロック
八潮 29－21 浦和西
八潮 34－7 大宮南
浦和西 21－13 大宮南

●hブロック
川口青陵 28－9 春日部工
川口青陵 43－10 埼玉第一
春日部工 16－10 埼玉第一

▼決勝トーナメント
浦和実業 16－8 浦和学院
川口北 10－8 伊奈学園
小松原女 19－18 埼玉栄
川口青陵 24－14 八潮

▼決勝リーグ
浦和実業 16－9 川口北
浦和実業 18－13 小松原女
浦和実業 17－15 川口青陵
川口青陵 17－12 川口北
川口青陵 16－16 小松原女
川口北 12－7 小松原女
〔順位〕①浦和実業②川口青陵③川口北④小松原女

茨城県高校総体

（6月20、21日／笠間高校）

〈男子〉
▼1回戦
土浦日大 30－14 霞ヶ浦
緑岡 13－12 太田一
土浦湖北 21－15 鉾田一
守谷 33－10 波崎
伊奈 27－16 竹園
土浦工 23－22 藤代
竜ヶ崎一 18－14 岩井
笠間 18－15 水海道一

▼2回戦
土浦日大 24－13 緑岡
守谷 17－10 土浦湖北
伊奈 19－5 土浦工
笠間 25－14 竜ヶ崎一

▼準決勝
土浦日大 25－14 守谷
笠間 19－16 伊奈

▼決勝
土浦日大 26（15－12、11－8）20 笠間

〈女子〉
▼1回戦
水海道二 47－2 笠間
中央 19－15 日立二
岩井 24－10 牛久
聖徳大付 32－11 石岡二
竜ヶ崎二 23－7 竜ヶ崎一
水海道一 27－12 湊二
愛国学園 25－13 鉾田二
麻生 25－9 結城二

▼2回戦
水海道二 24－6 中央
聖徳大付 26－16 岩井
竜ヶ崎二 23－15 水海道一
麻生 27－13 愛国学園

▼準決勝
水海道二 29－4 聖徳大付
麻生 19－12 竜ヶ崎二

▼決勝
水海道二 20（10－5、10－5）10 麻生

第22回関東クラブ選手権

（6月27、28日／日立栃木体育館ほか）

〈男子1部〉
▼1回戦
桜門ク 20－12 みかん倶楽部
富岡ク 19－16 筑波学園ク
I・Hク 23－14 北斗七星
甲府ク 16－15 小金ク

▼準決勝
桜門ク 17－13 富岡ク
甲府ク 20－13 I・Hク

▼決勝
桜門ク 23（8－9、15－7）16 甲府ク

〈男子2部〉
▼1回戦
日川ク 24－17 高崎ク
笠間ク 17－9 北ク
蒔田ク 18－12 46G会
若松ク 25－24 学芸球駿会
▼準決勝
日川ク 23－11 笠間ク
蒔田ク 18－17 若松ク
▼決勝
蒔田ク 18（9－9、9－8）17 日川ク

〈女子Aグループ〉
佳英ク 10－10 日川ク
佳英ク 13－4 光電ク
佳英ク 12－7 オレンジク
日川ク 15－11 光電ク
オレンジク 23－12 日川ク
オレンジク 23－10 光電ク
〔順位〕①佳英クラブ②オレンジクラブ③日川クラブ④光電クラブ

〈女子Bグループ〉
成美ク 13－10 若生ク
武蔵野ク 12－10 成美ク
武蔵野ク 22－12 若生ク
〔順位〕①武蔵野クラブ②成美クラブ③若生クラブ
▼3位決定戦
オレンジク 20－6 成美ク
▼決勝
佳英ク 24（9－6、15－8）14 武蔵野ク

東海

第39回東海高校総体
（6月20、21日／岐阜県民体育館）

〈男子〉
▼1回戦
愛知（愛知） 18－16 桑名（三重）
岐阜西工（岐阜） 14－14 2PTC0 清水東（静岡）
四日市工（三重） 19－13 市岐阜商（岐阜）
桜台（愛知） 27－17 清水市商（静岡）
▼準決勝
愛知 24－5 岐阜西工
桜台 26－12 四日市工
▼決勝
愛知 23（13－7、10－14）21 桜台

〈女子〉
▼1回戦
名短大付（愛知） 33－5 富田女子（岐阜）
暁（三重） 11－10 静岡城北（静岡）
養老女商（岐阜） 22－21 四日市商（三重）
東海女子（愛知） 15－15 3PTC2 清水市商（静岡）
▼準決勝
名短大付 23－13 暁
東海女子 14－8 養老女商
▼決勝
名短大付 28（14－5、14－5）10 東海女子

北信越

長野県高校総体
（6月5～7日／更植市民体育館）

〈男子〉
▼1回戦
千曲 25－10 蟻ヶ崎
野南 22－13 長野南
長野 26－12 梓川
美須々 31－16 北佐農
長野東 18－14 臼田
富士見 20－8 中野
▼2回戦
屋代 37－11 千曲
野南 17－15 清陵
田川 37－17 更農
上田 28－5 長野
坂城 34－14 美須々
松川 23－15 野北
長野東 28－21 松本一
小諸 30－13 富士見
▼3回戦
屋代 34－8 野南
田川 20－16 上田
坂城 28－9 松川
小諸 37－15 長野東
▼準決勝
屋代 23－14 田川
小諸 12－11 坂城
▼3位決定戦
坂城 21－15 田川
▼決勝
小諸 21（10－9、11－7）16 屋代

〈女子〉
▼1回戦
北佐農 16－15 美須々
小諸商 28－5 松本一
塩尻 31－3 千曲
臼田 21－7 更農
田川 28－7 長野南
▼2回戦
屋代 33－6 北佐農
小諸商 14－12 塩尻
蟻ヶ崎 32－10 臼田
佐久 23－10 田川
▼準決勝
屋代 24－7 小諸商
蟻ヶ崎 20－11 佐久
▼3位決定戦
佐久 10－9 小諸商
▼決勝
屋代 21（10－2、11－8）10 蟻ヶ崎

福井県春季高校総体
（6月6～8日／羽水高校ほか）

〈男子〉
▼予選リーグA組
北陸 35－6 武東
北陸 39－6 藤島
武東 28－17 藤島
▼同・B組
羽水 29－12 科技
武生 13－12 金津
羽水 25－15 武生
金津 34－11 科技
▼同・C組
金津 16－13 羽水
武生 22－10 科技
高志 31－13 福井商
高志 24－15 丹南
丹南 13－13 福井商
▼決勝トーナメント1回戦
金津 24－15 丹南
羽水 27－11 武東
▼準決勝
北陸 34－2 金津
高志 18－13 羽水
▼3位決定戦
金津 13－12 羽水
▼決勝
北陸 35（16－2、19－8）10 高志

〈女子〉
▼予選リーグD組
福井商 49－2 藤島
福井商 39－2 福井農
福井農 21－11 藤島
▼同・E組
羽水 22－7 科技
福井女 22－11 武東
羽水 33－9 武東
福井女 37－1 科技
羽水 14－10 福井女
武東 29－7 科技
▼同・F組
仁愛 37－0 武商
仁愛 37－6 高志
高志 29－3 武商
▼決勝トーナメント1回戦
福井女 29－8 高志
羽水 21－10 福井農

▼準決勝
福井商 25－2 福井女
仁愛 19－16 羽水
▼3位決定戦
羽水 15－11 福井女
▼決勝
福井商 18（8－6、10－4）10 仁愛

協会だより

［9月度常務理事会］

9月26日　於　日本協会

出席　中沢専務理事、松本監事他9名

1．ＪＯＣカップ・ジュニアオリンピック大会について
　ＪＯＣ制定の上記大会にハンドボール協会として参加し中学生による新規の大会として実施することに内定。
2．実業団女子トーナメント大会（新設）を日本協会主催行事としたい、男子と同じ位置付けとすることに決定。
3．平成4年度下期大会出席役員決定
4．第47回国体組み合わせ報告
5．第48回国体種別ブロック出場枠説明
6．アジアジュニア選手権及び東アジア大会結果報告
　アジアジュニア選手権　日本　男子2位、女子4位
　東アジア大会　日本　男子優勝、女子4位
7．各委員会報告
　(ア)財務委員会　賛助金の現状報告…次回に検討
　(イ)企画委員会　93ジャパンカップ検討結果中間報告
　(ウ)指導委員会　競技場施設基準について報告…更に検討
　(エ)リーグ運営委員会　委員会規定の一部改定…承認
　(オ)審判委員会　国際審判ペア変更について事情説明
　(カ)ＡＨＦの現状、大会の見通しについて報告

以上

近畿

全国高校総体京都府予選

（5月31日～6月21日／田辺高校ほか）

〈男子〉

▼1回戦
堀川 24－4 洛東
日吉丘 22－20 城陽

▼2回戦
南八幡 28－5 北稜
桃山 12－0 宇治
洛北 24－8 堀川
京学園 29－15 同志社
城南 12－10 洛西
向陽 18－9 乙訓
大谷 20－11 伏見工
久御山 22－16 嵯峨野
田辺 28－6 洛陽工
洛水 28－9 日吉丘
京都西 22－7 南八幡
東山 25－11 平安
山城 24－23 八幡
北嵯峨 32－6 洛星
東宇治 24－16 西乙訓
両洋 24－9 木津
西宇治 19－15 東稜
桂 33－11 桃山

▼3回戦
洛北 28－7 京学園
向陽 18－6 城南
大谷 23－13 久御山
洛水 32－11 田辺
京都西 21－14 東山
北嵯峨 17－11 山城
東宇治 15－10 両洋
桂 28－11 西宇治

▼準々決勝
洛北 23－11 向陽
洛水 26－15 大谷
北嵯峨 19－15 京都西
桂 21－12 嵯峨野

▼準決勝
洛北 23－10 洛水
桂 23－11 北嵯峨

▼3位決定戦
洛水 22－18 北嵯峨

▼決勝
桂 16（9－7、7－7）14 洛北

〈女子〉

▼1回戦
光華 19－2 田辺
精華 32－11 洛東
西宇治 19－10 桃山
城南 27－6 鴨沂
南八幡 23－6 西京商
西山 12－11 乙訓
洛西 12－10 京都女
東宇治 24－0 明徳商
久御山 9－8 日吉丘
京都学 15－12 北稜
洛水 30－8 塔南
府立商 18－11 西乙訓
東稜 12－11 桂
北嵯峨 22－1 山城

▼2回戦
洛北 33－0 光華
西宇治 15－11 精華
城南 16－4 南八幡
洛西 20－14 西山
東宇治 28－4 久御山
洛水 13－9 京学園
府立商 10－9 東稜
向陽 22－13 北嵯峨

▼準々決勝
洛北 26－6 西宇治
城南 13－10 洛西
東宇治 28－0 洛水
向陽 13－7 府立商

▼準決勝
洛北 23－9 城南
向陽 11－10 東宇治

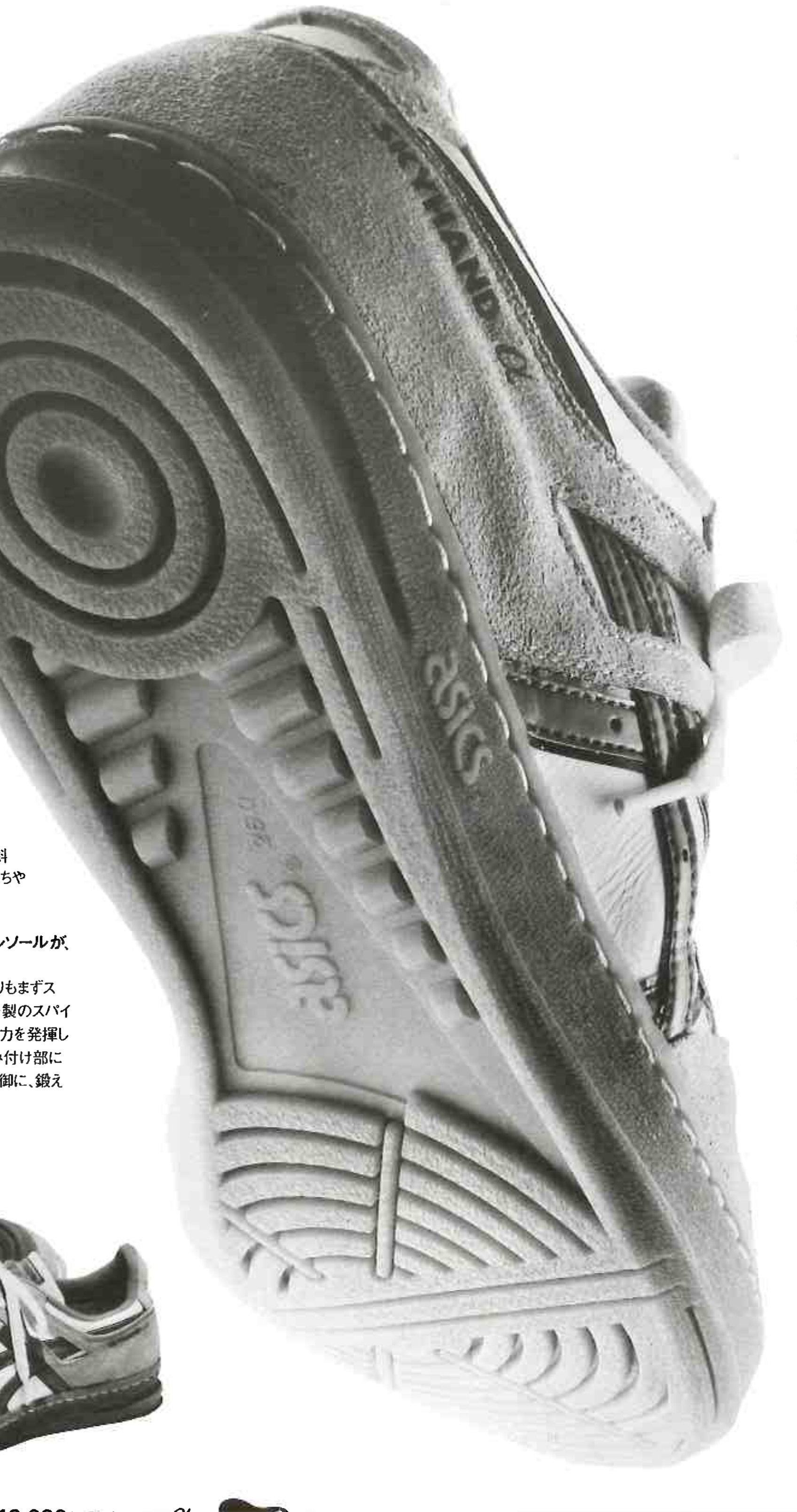
▼3位決定戦
東宇治 13－9 城南

▼決勝
洛北 23（13－6、10－4）10 向陽

asics®
ATHLETIC SHOES

Barcelona '92

ゴールに狙いをつけた傾斜角。



踏み付け部のエッジにつけた傾斜が、倒れ込みシュートを打ちやすくしました。
コートは狭く、ゴールポストも小さいハンドボール。厚い防御の壁を突き破ってシュートを決めるのは、簡単なことではありません。わずかな間隙をぬって決める倒れ込みシュートこそ、まさにハンドボールの醍醐味です。スカイハンド®ジャパンα-Sは、アウターソール踏みつけ部のエッジに傾斜をつけることにより、倒れ込みシュートを打ちやすくしました。

インドアのために生まれたスパイラルソールが、すばやい攻撃を支えます。
ハンドボールに要求されるものは、なによりもまずスピード。インドア専用に開発されたラバー製のスパイラルソールがすばやい動きにあわせて威力を発揮します。動きやすく、滑りにくい。しかも、踏み付け部には溝を配し、屈曲性をアップ。攻撃に、防御に、鍛えぬかれたフットワークに磨きがかかります。



品名 **スカイハンド®ジャパンα-S**
品番 **THH711** メーカー希望小売価格 **¥16,000**(消費税抜き)　αGEL
カラー/●ホワイト×Ⓦレッド・マリンブルー●ホワイト×Ⓦマリンブルー・レッド
サイズ/22.5～29.0㎝

がんばれ!ニッポン!
JGS25-18
アシックスは
オリンピックキャンペーンの
オフィシャルスポンサーです。

株式会社アシックス
●商品についてのお問い合わせは株式会社アシックス消費者相談室までどうぞ。
●Ⓡは㈱アシックスの登録商標です。
〒650 神戸市中央区港島中町7丁目1番1 TEL(078)303-2233(専用)・(078)303-3333(大代表)
〒130 東京都墨田区錦糸4丁目10番11号 TEL(03)3624-1814(専用)・(03)3624-2221(大代表)



スポーツあげたい、
スポーツほしい。
全国共通スポーツ券

(財)日本ハンドボール協会編
『ハンドボール』
第三二五号
昭和四十年六月七日 第三種郵便物認可
平成四年十月二十六日 印刷
平成四年十一月一日 発行
東京都渋谷区神南一—一—一
電話 代表 三四八一—二三六一
振替 東京 六—五八三四八番
編集兼発行人 中澤重夫
定価三百五十円
(年間購読料 三千三百円)

